
金か愛か人生か

knight bugs

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金が愛か人生か

【Nコード】

N9451W

【作者名】

knight bugs

【あらすじ】

16才の乙女にして、高校1年の蓮美は、自分の父親に騙されて父親の借金を肩代わりする羽目になった。しかも借金1億円。どーする蓮美?!

「おい！姉ちゃん！聞いてんのかよ？！ 借金1億円って言うてんだ！ 早く耳を揃えて返せ！」

ボロアパートの中で怒号が響く。グラサンをかけて、威圧するよ
うな物の言い方をして来る、チンピラ風情の二人組。
彼らを見て、何故か冷静になっているのは、私―東雲しのめ 蓮美はすみ 一応
16才。

なんで一応が着くのかって言うと、『あまりにも落ち着いてるから』と友達に言われる。それでも現役の女子高生。落ち着いてるって言うのは、こんな取り立て屋が毎回家にまで来る様になつたからだ。

こんなのは、いつもの事だ。大体こんなことになつたのも、全てアイツのせいだ！ アイツとは、違う名称で言えば 父親と呼ばれる。私に取ってみれば無責任って言うのは、この男の為にあるような言葉だと毎回思わされる。

私の頭の中では、あのヘラヘラした自称プレイボーイ男が、夜の街をスキップしながら歩いている。しかも全ての自分の責任を10代の娘に押し付けて、自分だけ身軽になつて何処へでも飛んで行く糸が切れた尻上体の男が、私の頭痛の元である。その男のせいでこんな事になつたのだ。
私に怒鳴つて来たチンピラ風情の男2人を睨んだ私は、肩を震わせた。

何でなんで、いつも母さんやワタシの所にお鉢が回つて来るのよ！

「そんなお金があつたら、アンタ達に借金なんてしているわけないでしょー！」

威勢の良い担荷を切ったのは、花も恥じらう女子高生―東雲しのめ 蓮は美すみ16才である。シッコイですが、私立高校に通っている。成績は中の中くらいだ。自分の外見は…と聞かれたら、家に鏡が無いから分からないし、そんな事を気にしている時間なんて、今の私には無かった。

身長は、四月に学校で計ってもらった時には、168cmと言われていた。髪の毛は、長いと言うのも切りに行く暇がない。だから、いつも三つ編みにしている。目は少し変わった色をしているらしいらしいと言うのは、私は自分の瞳の色なんて、じっくりと鏡で見た事がない。普段は黒目なのだが、月明かりに照らされると瞳の色が濃い紫に変わるのだ。一度、死んだ母親にその事を言われて、夜出かけるときは、必ず伊達メガネをする事になっている。瞳の色を隠す為だ。

母親は、クソ親父と一緒にあったばかりに、苦勞に苦勞を重ねてそして死んで行った。

このクソ親父は、その娘にまでも苦勞をかけさせて、自分はこのうと自由奔放に生きて行くのだろう。本当に腐ったヤツだ！毎日毎日働いて働いて、少しでも借金を返さないとやっていけないのだ。それもこれも全てあのクソ親父のせいである。

いきなり言われた時に、あのにへら顔の親父を思い出した。

やられた！どうしてあの時にもっと深く考えなかったんだろう？！思わず自分の失態に舌打をしていた私は、窓から見える澄み切った青空を睨んでいた。

あれは、一週間前！いや、三週間前だったかな。珍しく親父が家に帰って来ていた。

『なあ、蓮美！オメー幾つだ？』

『え？』

『もうすぐ誕生日だろ？　んで幾つになるんだ？』

何で、今まで何も誕生日の事で聞いて来なかったヤツが、いきなり私に聞いて来るんだよ！嫌な予感がして来るが、私にはものこの碌でなしの父親しか、私の家族はいない。私の最愛の母さんは、去年の暮れに過労で倒れてそのまま帰らぬ人となった。

母さんは、毎年私の誕生日の事を覚えていてくれたのに、コイツと来たら、いつも下手の横好きって感じのマージャンと競馬、そしてパチンコをしている。働けてんだよ！

一体、今まで誰がアンタの借金を払って来てやってたんだか知ってるのお〜！

心の中で、葛藤するほど荒れていた私は、大きく深呼吸すると自分を落ち着かせた。

『つたく〜　16よ。自分の娘の歳くらい覚えてなさいよ。正雄！あんだ、まさかとは思うけど、また懲りもせずに借金をこしらえたんじゃないでしょうね?!』

『はえ〜な。もう16か。んなら、そろそろ自分用の判でも作っておくか？』

おい、人の言っている事、聞いてんのか？　おーい！
この目の前にいる男は、私のクソ親父で名前は、東雲　正雄。何でも本人曰く、昔はちつとた〜　名の知れたプレイボーイだったんだと自慢しています。その話を聞く度に私から怒られています。

『それは、借金まみれで名の知れたってんじゃないの？　だって、

いつも母さんがあなたの飲み代のツケをはらっていたんだからね！

」

たしかにそれは、本当だったらしい。でも、私は父さんの実家も母さんの実家も知らずに育つて来た。一体私には、従兄弟とかもしかして親父の隠し子とかいるんじゃないのか？　と思ってしまう。

そんなちよつと昔の事を思い出していた時に誕生日の事を聞かれてその上、判コの事も言われ私つてば、頭が回っていないかつたんだろ
うな。

「え？　うん？」

「そうか、そうか！　良かった良かった！　実はな、蓮美　喜べ！
もう、業者は呼んであるんだ。（ピンポーン）な！」

あれよあれよと言う間に私専用の判が作られました。それを作つた親父は、自分が持っていた用紙に「試し打ちしないと分からないからな」などと言って、ポンポンと勢い良く判を押すと満面の笑みで台風の如く何処かへ行ってしまった。

それから二週間経つて今の状態なんだけど、学校から家に帰つたら怖いお兄さん達が家の中に入って来て、私に「あんたが東雲　蓮美つて言うんだろ？」　そう言つて来た。

私は、怖かつたけど真直ぐ彼らの目を見て「ええ。だから何ですか？」　と言い返した。

彼らに取ってみれば、私のそんな態度が気に食わなかつたのだろう。私の手首を握つて、ニヤニヤした顔で言つて来た。

「あんたさ、自分の親父に借金背負わされてんだよ。つまり親父の借金の肩代わりになつてんだよな」

「?」

1 (後書き)

WIFIが壊れてPCが使えなかった時に、書き始めた作品です。

「あんたさ」 自分の親父に借金背負わされてんだよ。つまり親父の借金の肩代わりになつてんだよな」

「へ？」

何ですと？ 今、この人つてば 私に何か言つて来たよね？ 確か、この目の前のあんちゃんが、世にも恐ろしい事をサラリと言つたんようだけど…。

聞き間違いじゃないよね？

分からない．．．誰か私に分かる様に説明して欲しいです！！ どうしてこうも、苦勞と言つ名不幸が次々と私に舞い込んで来るのか．．．。どうせなら、金が有り余っている奴らの所に行けよ！

思えば、あのクソ親父と母親が結婚して私が出来たのだが．．。

（これも後で？だと分かった。） なのに、何で私があいつの尻拭いをしなきゃなんないんだよ！ 私が物心着いた時には、すでに親父がギャンブルに嵌つて自分の給料さえも、勤め先に前借りしてまで金をつぎ込んで行く様になった。母親も、初めはパートに出て働いていた。母さんは元々、身体が丈夫な人ではなかった。

度重なる夫の借金と心労でとうとう倒れてしまった。そして、母さんは亡くなってしまった。それから、このアパートの大家さんに面倒を見てもらっていた。大家さんは、私の母親とも知り合いだったみたいだけど、あまり母親の話はしてくれない。ただ一度だけ話してくれたけど、あまり昔の事で思い出せない．．．。軽く現実逃避していたら、借金取りの兄ちゃんに親父が借りたと言つ金額を言つて来た。

「一億円だよ。一億円。あなたの親父が『蓮美が返すって言うて聞かぬーから、判を押させてやった』とか言っていたぜ。さー返してもらおうか、今月の支払いをよー！」

そう言つて奴らは、ピラピラと私に借用証明書成るものを見せてきた。其処には確かに書いてあるし、押してある。私の判コが．．．
。チキシヨー！あのくそ親父め！

「な．．．．んなことあるわけないだろう！あのクソ親父！今度会つたら、ボコボコにして、アバラの4本でも折つてやる！」

初めっからそのつもりだったんだ！

やつらは、私のなけなしのバイト代6万円を財布から奪うと、笑いながら家から出て行つた。これで此処のアパートの家賃も払えない。そう思つた私は、フラフラと駅まで歩いて行つた。

「あーあ。明日が来なきや良いのに」

住む所も追われそうだし、蓮美は溜息しか出なかつた。

「家賃込みで2万のアパートなんて、今時珍しい位なのに．．．。風呂トイレ共同だけど．．．これからどうすれば良いのよお〜！娘に自分の借金を押し付けるなんて、最低！あのクソ馬鹿親父！」

あまりにも悔しくて涙が出て来る。これ以上、大家さんに迷惑はかけられないよ．．．。

「あーあ。またバイトを増やさないと…」

深夜のバイトで有るのって言つたら、工事現場くらいかな…。やら

せてくれるだろうか？ アパートのドアを閉めて、カギをかけていると大家さんが慌てて来た。

「蓮美ちゃん！無事だったの？」

大家さんは、真っ赤な顔をして飛んで来た。あの～大家さん、言っちゃ～何ですが、ぼつり体型の大家さんが、このオンボロアパートの中を走られると……床がミシミシってなっているんですけど……。それって、ホラー映画並みに怖いんですけどお！

「え？」

自分の思考に走っていた蓮美は、大家さんの顔を見て、現実引き戻された。

「だって、あの取り立ての人達の声が聞こえたから、おばさん驚いちゃって！ 蓮美ちゃん、あんたまさか変なバイトとか考えていないでしょうね？」

「いえ……ただ、深夜の工事現場のバイトでも始めようと思ってますけど……」

「蓮見ちゃん。今月分のお家賃は来月で良いから。あんたは今のバイトと学業を続けて頂戴。分かったわね？きちんと高校を卒業するのよ」

「大家さん……」

少し潤って来てしまった私は、泣かない様に顔をあげた。

「でないよ、真澄ちゃん…あんたのお母さんに会わせる顔がないよ。真澄ちゃんに、あんたの事を頼まれていたからね」

大家さんと私のお母さんは、中学から親友だったと聞かされていた。大家さんの話では、どうしてあの才色兼備の真澄ちゃんが、あんなぐーたら男と一緒にになってしまったのが、世界の七不思議に入るくらい、不思議だと言っていた。

やっぱり、親父は昔っからクソ親父だったんだ！

晴々とした青空の中、私の心は竜巻が幾つも来てます！って言う位に荒れていた。

いつその事、今すぐにも世界が滅亡してくれれば良いのに！

平和そうな空の下で、一人悶々としている私。

土曜日だって言うのに、なんでこんな嫌な思いしなくちゃいけないのよ．．．！さっさと部屋の掃除と洗濯を終わらせると冷蔵庫を開けてみた。

入っているのは、野菜類ばかり。だって、お肉は高くて買えないもの。お米も安い時に溜め買いしている。米が無い時は、小麦粉でうどんを作ったりしている。

こんな気分の中でも、夜ご飯の事を考えなきゃなんないなんて．．．
．最悪だ。

固いパンの耳をかじりながら、お水でそれを流し込んでいた。

（もう．．．嫌だ。こんな．．．どうして、あの無責任のクソ親父の後始末を私がやらなきゃなんないのよ！）

そう思ったら、私はいつの間にかアパートの外を歩いていた。

フラフラと駅に寄って、定期を使って改札を通るとく間もなく4番線に急行列車が入って来ます。黄色い線の後までお下がり下さい。> と言うアナウンスが駅構内に響いた。4番線のプラットホームに立っていた私は、思わず黄色い線の内側に入っていた。

（今、一歩踏み出せば何も考えなくても、済むかも知れない．．．）

そんな事を考えていた時に、私の視界の端に杖をついた老人がホームを歩いていて線路に落ちてしまった。それを偶然見た私は、知

らないうちに身体が勝手に動いて、線路に落ちた人を抱き締めるとポケットと言われる空間が開いた所にその人を抱き締めるとそこに避難していた。間一髪で電車が自分達をすり抜けて行った。ガタンガタンと耳の側で聞く車輪の音は、普段よりも大きくそして不気味に聞こえた。

思わず蓮美は、自分がやるうとしていた事に対して、恐怖を感じた。もし、あのままこの老人に気付くのが遅かったら、自分が助けに飛び降りても無駄死にだったのかもしれない。

夢中になって身体が独りでに動いていた。ポケットと呼ばれる場所から、急行列車が通り過ぎるのを確認すると、ピリリリ〜！と笛が鳴った。騒然とした駅の構内では、駅員さん達が駆けつけてくれて私とおじいさんを線路から引き上げてくれた。

自分が飛び降りて、このおじいさんを助けなかったら、この人は確実に死んでいただろう。助かって良かったと思った。

駅員さん達が数人で私とおじいさんをプラットフォームに引き上げてくれた。今まで気を張っていたせいか、無事にプラットフォームに着いた時は涙が出そうだった。

「良かった．．．おじいさんが助かって」

「あ、ありがとう．．．」

おじいさんから、言われた言葉にホッとしたけど、そう言えば、私って本当は死ぬ気だったんですけど．．．。

正気になった時に、借金1億円の事を思い出してしまった。なつてこつたい……。

どんよりと曇る私の顔には、『後悔』と言う2文字が浮かんで来た。

クソ親父の借金をどうやって返せば良いのよ！

今度見つけたら、コブラツイストで落としてやる！　それが、アバラの1本や2本でも折ってやりたいくらいだ！　いいや！　あの二へら顔のクソ親父を見たら、ラリアートで、四の字固めにしてやる！

蓮美は、ギリリっつと悔しそうに歯ぎしりをした。

漸く　その事に気がついた私は、ほつとしたのか　人前にも関わらず、ポロポロと泣き出した。　周りに居た人達は、私がおじいさんを助けて無事を確認したから、安心したのだと思っているのだろう。　私がヨロヨロと立ち上がると、ヒョロヒョロとしたニキビ顔の駅員と少し小太りした痩せれば好い男なんだろうな　って言う顔をした駅長が、息を切らせながら走ってやって来て、私とおじいさんを駅長室へと連れて行った。

其処で、軽く　く世間話みたいな事を聞かれた。　家族構成とか、通っている学校とか、だけど彼らは警察じゃないから、そこまで強制する事はない。

だからこそ、私は頑に自分の名前を言うのを拒んだ。　幾ら親父に騙されたとはいえ、自分の考えが浅はかだったせいで、勝手に判を作られたんだもん。　その上、勝手に私の判を使って借用証明書に押されてしまった、というトラウマもあって、自分の情報をおいそれと人に話す事がどれだけ危険かと言う事を嫌でも身に付いてしまったからだ。　例え優しそうな人達でも、私を利用しようとする人も

いるから、気をつけないと……！
お茶を飲んだ私は、駅長さんや、おじいさんを見た。

「それは、プライバシーの侵害に値するので、お教えする事は出来ません。それに私は、そんなに褒められた人間ではありません」

「駅員さん達の顔色が少し固まっている。分かるよ……。私の言い方が、少し高飛車だって言うのも。そして小娘で生意気だって言うのも。でも、これも自分を護る為なんだもん。分かってくれよ……。ソファから立ち上がった蓮美は、駅員さん達にっこりといつもの営業スマイルをして、立ち去るつもりだったんだけどさ」

ヒョロヒョロでニキビ顔の駅員のお兄さん、多分この人は新人さんだわね。この人から、いきなり両手で握手をされて、ブンブンと力強くされたもんだから、私の右手が干切れるかもって、真面目に思ったわ。

でも、他の駅員達からも「あなた御若いのに、よく身体を張って助けましたね。すごいですよ」と言ってくれたが、まさか彼らも老人を助けた私が、自殺願望者だったなんて 夢にも思わなかったのだろうな……。きっと。

「B r e v e ナ、オジヨウサン。ホントウ ニ アリガトウ」

片言の日本語？ 蓮美は、その声のする方を見てみた。ケンツキーのおじいさんみたいに、白髪に黒いけど、少し色が違う瞳。ああ、こんな人の事をダンディって言うのかしら。この人って若い頃は凄くイケメンだったんだろうな。色白で彫りが深い顔には、凛々しい白い眉毛、しかも、銀縁メガネをかけている所なんか本当にケタの前で立っているおじいさんみたいだわ

優しくそうに私を見つめるその人は、私の前に大きな手を差し出して

来た。私は驚いて、手を引っ込めた。でもこのおじいさんはワタシの白く手を掴むと、ギュツと握りしめてきた。

突然おじいさんに手を握られた蓮美は、あまりの事でビックリしていた。おじいさんの左手薬指に光る大きな赤い指輪を見て、まるで玩具の指輪みたい．．．．．と思つて、にっこりと蓮美が微笑むとおじいさんも笑顔を浮かべていた。

おじいさんから名前と連絡先を聞かれたが、蓮美は「人として当然の事をしたまでです。名乗る程ではありませんから。では、失礼します」そう言つと名前も告げずに、駅長室を出て行つた。腕時計を見た蓮美は、軽く舌打をした。

「12時15分．．．．．はあくこれからバイトの時間だわ」

蓮美はそう呟くと急いでバイト先の小さなレストラン『まほろば』へと向つた。蓮美は、もう自分が助けた老人の事などすっかり忘れていた。今は自分名義にさせられた借金を返済する為に、毎日馬車馬のように働くしか無いのだ。

高校生ではあるが、家の事情と言う事もあつて学校側も蓮美に『まほろば』で働く事を容認してくれた。影では蓮美の事を悪く言う奴らも居たが、蓮美は日々相手にしていられなかった。

そんな事で泣くよりも、一円でも一日でも早く借金を返さないと．．．その事だけで頭がいっぱいだったからだ。

土曜日に蓮美が人命救助をしたと言う事で、月曜日は職員室に呼び出された蓮美は、ビクビクしながら職員室のドアをスライドして開けた。

「失礼しまーす」

「お！ 我が校の誇りが来たぞ！」

え？ 今度は、埃扱いですか？ 借金返すのに必死で働いているか弱い女子高生に向って……。少し私が頬を膨らませて剥かれているら担任のバグ先生（本名 峰山先生 顔がバグに似ている為、皆バグ先生と呼んでいる）から、「ほれ。これ食券やるぞ」そう言つて蓮美に渡されたのは、何と30枚の食堂の食券だった。しかも、人気のAランチ！！

手に渡された食券の束を見て、蓮美はじつとバグ先生を見た。

「私、売春はしませんよ」

「はあ？」

「え？」

いきなりバグ先生からデコピンをされた私は、額を押さえて「くく！！」とのたうち回っていた。

「お前はアホか？ ほれ、お前土曜日にご老人がホームから線路に落ちたのをお前が助けたんだろ？」

「え？ どうして、先生達が知ってるの？」

呆然として、私が間抜けのように口を開けたままバグ先生を見ると、先生は笑いながら教えてくれた。バグ先生からは、食券と一緒に、サロンパスを大量に貰った。

どうやら、私がおじいさんを助けた時に、しこたま腕と肩、背中を思いつきり線路の枕木で打撲していたのを知っていたようだ。恐るべし担任。

パグ先生は、親指を突き出してクイクイと校長室を指していた。教師陣達から褒められたが、蓮美はまさか「本当は自分が電車に飛び込むつもりだったんです」えへへ」と言う事は言えなかった。それに、なんで私だとバレたんだろうかと不思議に思ってしまった。蓮美は知らなかったが、一部始終を見ていた人達の中に、蓮美が働いているバイト先の定食『まほろば』の常連客が居たそうだ。どうやら、彼らから私の情報が漏れたと後でマスターから、自慢話として聞かされた。

「いらっしやいませ〜！」

「お〜蓮美ちゃん！また来たよ〜！」

「あ〜源さん！ コーヒですね。すぐ用意します〜！」

あの日から、丁度一ヶ月たったころ。毎日学校帰りには必ず『まほろば』でアルバイトをしている蓮美の声が、今日もお店の中で元気に響いている。

「ではご注文をくりかえします、イカスミスパゲッティとカルボナーラ、そしてサラダでございますね。ドレッシングはフレンチですね。 はい畏まりました。」

注文を手元のオーダー用紙に記入すると、つこりと営業スマイルをして、テーブルから立ち去った蓮美は、調理場へと向った。

「マスター！オーダー入りま〜す！イカスミone！ カルボナーラone！ サラダone！後、源さんの誕生日ですよ〜！」

「あいよ！はーちゃん」

そんなに広く無い定食屋の中には、4人がけのテーブルが6個置いてある。後は、カウンターで食べるだけなのだが、源さんはいつもカウンターでコーヒーを飲んでから、隣にある自分のお店に行くのだ。彼のお店は八百屋さん。チャキチャキの江戸っ子って感じで、

蓮美は源さんの飾らない優しさが大好きだ。

源さんがいつも飲むコーヒの横に、『源さん。いつも笑顔をありがとう。誕生日おめでとう！』と書いた手作りカードを添えた。

源さんは、角刈りの頭を掻きながら、垂れ目を一段と垂らすと幸せそうに笑って受け取ってくれた。

「おお！ーはーちゃん。よくオイラの誕生日の事を覚えていてくれたんだね。嬉しいね。男冥利に尽きるってもんだよね。あれ？このカードって、もしかして、はーちゃんが自分で漉いて作ったのか？」

名刺サイズのカードは、所々が薄かったり厚かったりと一定の厚みはないが、蓮美が心を込めて手作りした物である。

お金がない蓮美には、プレゼントを買う事もすら無理である。それに一体源さんがどんな物を欲しいのかは、大体分かるが未成年だからそれは買えない（煙草や酒）それならと思っただけで自分出来る事と思っただけ、蓮美は感謝の気持ちを込めてカードを作ったのだ。

蓮美は、頬をピンク色に染めるとお盆を抱き抱える様に持って、コクンと頷いた。

「私は、こんな事くらいしか出来ないから……。源さんにも、ロンさんやエイミーさんに、大家さん達にいつも助けってもらってばかりなもの。私だって、人の役に立ちたい」

言葉を一言一句噛み締める様にして、言った蓮美の頭に源さんの大きなごつごつとした手が置かれた。髪の毛をくしゃくしゃにする程に撫でられると蓮美は泣きたいのを我慢する為に、はにかんだ様に下を向いていた。

毎週末の私のスケジュールは忙しい。毎朝の新聞配達に、家の掃除洗濯をして、バイトで犬の散歩も始めたから、友達と遊んでいる暇なんてない。

普通の女子高生なら、友達とカフェやゲーセンに行って遊んだり、ショッピングしたりするんだろうけど、私にはそんな時間も金もない！

この日の土曜日も早朝まだ夜が開け切れてない頃に、布団から飛び起きると新聞配達に出かけた。5月と言っても、早朝になるとまだ寒いくらいだ。ダイエットと身体作りも兼ねて走って新聞配達をしている。だって、チャリ買う金がない。そんなのを買うよりも、私としては借金を返して行った方が有意義だ！

新聞屋にも配達用のチャリがあるけど、ペダルのこぎ過ぎで太腿が太くなりそう。それに、この新聞配達をするようになってから私の持久力があがり、マラソンの大会で良い成績を治める事ができたんだ。今は、私立校で特待生として通ってられるのも、この新聞配達のお陰だと思っている。

漸く、朝の日課である新聞配達を終わらせた。もう、朝日も昇り道路には、毎日走っているランナーの人達と挨拶を交わすと、蓮美は大きく伸びをした。

「ん〜！！ これから、家の掃除と洗濯か〜！ あ！ ベランダの家庭菜園は、どうなってるかな？」

確か、今日当たりキュウリが採れそうだったし、プチトマトも美味しそうになっていたもんね。朝の囁かな楽しみを求めて 家に帰る蓮美の姿を塀の影から誰かが除いていたなんて、当の本人は知ったこっちゃない。

部屋の掃除も洗濯、そして近所のお金持ちマダムの犬の世話もきちりやって、今日もお小遣いゲットしてきた蓮美は、嬉しくて顔が二ヘラ〜と笑ってしまった。

そうこうしている内に、もうバイトの時間になった。

12時30分から休憩時間も入れて、夜8時過ぎる頃に上がるとスターから「ハーチャン！これ、今月分アルよ」

「え？ エイミーさん。でも、先々週にお給料を貰ったよ。だから、これは貰えないよ」

蓮美がそう言っただけで給料袋をエイミーに返すとエイミーは、にっこり微笑みながら旦那さんの龍^{リュウ}さんを見た。ここは、定食屋だがマスターの龍^{リュウ}さんとエイミーさんはイギリス系の中国人だ。でも、中国には住んだ事も行つた事も無いと話していた。彼らは元々イギリスに住んでいて、偶々旅行で来た日本に惚れ込んで、此処に住する事にしたんだと言っていた。

「ハーチャン。これは、アパートのお家賃に使うアルヨ。エイミーも俺もハーチャンには、いつも助けてもらっているアルヨ。こんな事しか出来ないアルが、明日も頼むよ！ハーチャンは、線路に落ちた老人を助けたんだって？ 偉いアルヨ。源さんが、あの時駅のホームでハーちゃんが線路に飛び込んで老人を助けるのを見たんだって言ってたアルヨ」

学校にバレたのは、源さんがチクった…。いえ話したせいか…。そういや、私が通っている高校の校長と源さんは、確か飲み友達だから自然とそんな話を話すんだろうな。本来ならば、バイトを許さない蓮美が、何故バイトするのを許されたのかと言うのも、源さん経由で校長に蓮美の家庭の事情を話したからなんだそうだ。こ

れは、校長から後で聞いた事だったが…。憎いね、源さん。

優しいマスターとおかみさんに何度も泣きながらお礼を言った蓮美は、給料を貰うとぺこりと頭を下げた。泣き過ぎて鼻の頭が真っ赤になってしまっている。

蓮美は、急いで家に戻ると大家さんの所へ向った。大家さんは蓮美を見て黙って抱き締めてくれた。

「あんたも真澄さんと一緒に、あんな男と一緒になっちゃったもんだから、苦労するわね…。今月分ちゃんと頂いたわよ。今度あの正雄ちゃんが来たら、首根っこ捕まえて此処のアパートの柱にでも縛り付けておくからね！」

大家さんの勇ましい言葉に涙目になりながらも、蓮美はお礼を言うとうと自分の部屋へと帰って行った。

大家さんと蓮美の父親 東雲 正雄は2才の頃から高校までの腐れ縁だと話してくれた。いわゆる幼馴染みだ。だから今でも正雄ちゃんと呼んでいるし、お金で困っている蓮見達親子を自分のアパートに住まわせてくれている。蓮美に取ってはとても有り難い人である。洗面器とバスセットを持って共同の風呂場に向う蓮美に誰かが声をかけて来た。

「あのおく、東雲 蓮美さん…。ですか？」

6 (後書き)

新聞配達は、やったことないですが、犬の散歩はバイトでやりましたよ。

また、誰か蓮美ちゃんを訪ねに来ましたね。

今度も、あの借金取りでしょうか？

「あのおく、東雲 蓮美さん…ですか？」

聞き慣れない丁寧な物の言い方だ…一体誰なんだろう？
バリトンの声って、こんな感じの声なのかしら？

いつもの借金取りのチンピラ達が、まき散らす怒声とは大違いだね。
思わず蓮美は声だけで、うっとりとしてしまう。そんな蓮美の
妄想を現実に戻させたのは、頭の片隅から聞こえる『ちやり〜ん
ちやり〜ん』と言う小銭が積みかねられる音だった。

例え、想像でもこの音を聞けば、嫌がおうにも現実に引き戻されて
しまうのは、蓮美の弱い所でもある。――
まさかこの間の借金取りの大親分とか？

（一応、きちんと返済はしているわよ！ この間だって、なけなし
のお金を取り立ててくれたんじゃないの！ お陰で大家さんにまで
心配をかけっぱなしになるし…これも、全てあのクソ親父が
元凶よ！）

声をかけられたのは良いが、今 蓮美の頭の中では、色々な恐ろし
い想像が、回っている。

（あ…もしかして、あのクソ親父は、また何処かで金を借りた
とか言うんじゃないでしょうね…。。。それか、とうとう私に身
売りさせるとか？）

ゴッドファーザーのテーマソングが、頭の中を駆け巡る。

覚悟を決めた様に目をギュッと瞑った蓮美は、心の中で母親の真澄
に話しかけていた。

（お母さん、先立つ不孝をお許し下さい．．．って、お母さんは、もう死んでいたんだわ。じゃ無くって！ お母さん、今から蓮美もお母さんの所へ行きますから！ 待っていて下さい）

ブルブルと自分を抱き締めると身震いをした蓮美は、呼吸を整えようと振り返った。心臓の鼓動が、こんなに胸を貫く程、痛く感じる事は無かった。私って、心臓病だったのかしら．．．。こんなに弱いのに、働き詰めで、死んじゃうのは嫌だ！ どうせなら、恋の一つや二つしてみたかった。身を焦がすような恋なんて、貧乏のどん底にいる私には無理よね．．．。このまま吉原に私は売られて行くんだわ．．．。

私って、可哀想！ そうよ私は可哀想なのよ！ そう思うと思わずガッツポーズをしてしまう蓮美にまた声かけられる。

「もしもし？」

「お掛けになった電話番号は、現在使われておりません」

思わず条件反射で言ってしまった言葉に、蓮美は踞って頭を抱え込んでしまった。

返済が近づくと必ずって言っていたい程、取り立て屋から返済催促の電話が蓮美の家にかかって来る。蓮美は、その度にこの手を使うのだ。がつくりと肩を落とす蓮美は、引き攣った笑顔で声がする方向って振り返った。

「は、はい。 東雲 蓮美は、私ですけど．．．。あ、あのま、まさか．．．また父が謝金でもつくったんですか？」

「え？ は？ 借金．．．ですか？ いえ、そうではありません。今

日は私のご主人の命でこちらに伺わせて頂きました」

其処に立っていたのは、銀縁メガネをかけて高そうなブランド物のスーツをきつちりと着こなした男の人だった。こんなボロアパルトに、これだけ似合わない人って居ないわね……。そんな事を思っていた蓮美だった。借金のことじゃないと聞いた蓮美は、思わず神に祈りを捧げてしまった。

（ありがとう！ 神様！！ 良かった）。また、あの碌でなしが借金を作ったのかと思つてヒヤリとしたわ）

「はあ……………」

間の抜けた声をだしてしまつた蓮美は、ずっと目の前の男の人の事をガン見していた。

はーイケメンつて、多分この人の事を言うんだな。身長も割と高いし、あ……。そこ気をつけないと、豆電球に頭をぶつけるわよ……。いや、ぶつけるつてよりも、豆電球の熱でイケメンさんの額を火傷するかもよ……。などと思つていたら、この人つてば、後に目が付いているのかしら？ それとも、蜘蛛みたいに目が4つ付いているとか……。だつて、器用にヒョイツて豆電球も蜘蛛の巣も避けて、こつちに向つて歩いて来るんだもん。

銀縁メガネからだけど、この人つて本当に綺麗な瞳をしてるんだ。

あれ？ でも瞳が黒じゃなくて、藍色なのかな……。いや、待てよ……。この色つてば、母さんの瞳の色に少し似ているわ。それつて、私と同じ色か、少し薄い位かも……。

それに、鼻も団子っ鼻じゃなくて鼻筋がスツと通つていて、高い。

唇も薄いけど厚くもないって感じで整っている。は、私もこんな顔に産まれて来てたら、スカウトとかすぐに来るんだろうな。そしたら、お金もウハウハで貰えるし……。蓮美の妄想は何処までも、金で繋がっているようだ。

そういえば、この人の髪の毛って、何だか光の加減で金色に見えるな……。このアパートの豆電球の光の下では、薄い茶色に所々金色が混じっている様に見える。

太陽の下では、どう見えるのかしら……。

う、うん、こう言う人の事を中世の騎士みたいって言うんだろうな……。

(こんな人に愛を語ってもらいたいわ！ 『蓮美、愛を貰く為にあなたをチンピラどもから護ってみせましょう！』 な、なんて言うて欲しいわ……)

私の妄想は、プロポーズの言葉まで言わせている。蓮美は、顔を真っ青にしたかと思えば、次に真っ赤になると、初めて目にする綺麗な男の人の事を穴が開くくらい、じっとみていた。

微かに匂う香りが、何だか懐かしい感じがするけど……一体なんなんだろう。微かに頭の中に浮かぶシーン……。

思い出しそうで、思い出せない。

こう言うのって、イライラするのよね……！ 早よ思い出せ……！ ま、いつか思い出すでしょ。今は、この目の前の王子様のような顔をもっと堪能しておきたいわ！

この人の顔を見て、明日も仕事を頑張れるって思っちゃってもん！

カランと洗面器の中の石鹸がケースの中から飛び出して洗面器の中で滑っている音が、響いた。

(げー！ しまった！ これからお風呂に入らないと．．．．。それにこんな格好しているしな)

思わず、自分の服装を改めて見てみると、酷いもんだ。今の蓮美の格好は、着古したヨレヨレのTシャツに赤いジャージ姿だ。しかも、膝の所がすり切れたり破れたりしている。それを何度も繕っているから、所々に他の色の布地が入っているのだ。これって自爆って感じだわ…。どうせなら、もっと可愛い服を着て居れば良かったかも。でも、可愛い服なんて持ってないし。

それに、頭は面倒なので、束ねてチョンマゲにしている。所謂、バ 殿さまのようだ。肌の色が人よりも白いせいもあって、そんな風に見えるんだろっな)。ただ違うのは、私の眉は綺麗だと言っ事だけが、自慢だ。

(な、何でこんな格好の時に、イケメンが此処に来るのよ！ どうせなら、もう少しマシな格好の時に来て欲しかったわ！)

「あ、あのぉ～ 時間、かかりますか？」

「え？ ええ。蓮美様には、是が非にも会って頂きたい方が、居ますので．．．お時間があるので．．．．」

目の前のイケメンは、胸元の内ポケットから、分厚い手帳を取り

出すと パラパラと捲り始めた。

（この手帳も黒い色で、多分高級品なんだろうな。毎回金を回収に来るチンピラ達の手帳とは、大違いだね。あの人達のは、ペラッペラの手帳なんだもん。）

胸元のポケットに刺してあった、万年筆を取り出した男は、予定表に何やら書き足していた。

（あら？ お手持ちの万年筆も太すぎて書きにくそうだね。どうせなら、100均のボールペンの方が書きやすそうだけだな。あの万年筆を売ったら、何週間分のご飯にありつけるのかしら？）

「蓮美様、これからのご予約はありますか？」

「.....」

（あ、予定表ね...。そんなに予定が詰まっているんですかあ。私とは大違いの予定なんだろうな。私の場合は学校 バイト 家の順番だから...。多分このイケメンさんの場合は、女とか社交界のパーティなんだろうな...。全く時限が違い過ぎるわ。）

「あ、予定ですかあ？」

（私は、バスセットを持って立っているんだけど、分かんないの？ 風呂に入るに決まってるでしょ！乙女にそれを言わせたいのか？）

思わず、石鹸が入ったお風呂セットを大げさに「カラカラ」と音を立てて揺すった。

「あ……」

そう言うのと、彼は気まずい様に手帳を内ポケットに、そして万年筆を胸元のポケットに仕舞うと、右手で自分の口を覆っていた。

この人の手つて、大きいけど綺麗な指をしているんだ。右手の中指に指輪？ 指輪…何処だろう、何処かでこの指輪と同じ物を見たような気がするんだけど…。うーん 借金取りのあんちゃん達も、手には指輪を着けてたけど、それは物凄く趣味の悪いごっつい指輪を着けてたし、かと言ってエイミーも指輪を着けてるけど、何か違う。あれは、結婚指輪だったからな。

私の頭の中に、セピア色に色褪せた母さんとの思い出が 出て来る。そう言えば、母さんも指輪していたな。だけど、左手薬指じゃなかった。右手の中指だったな。思い出そうとしても、そこまでしか思い出せない。

「蓮美様？ どうされましたか？」

色々な事を考えていた私は、思わず百面相をしていたらしい。これは、よく友達にも言われる。『蓮美は、いつも妄想の世界に入っているとき』。コロコロと表情が変わるのよね。でも、普段はクールなのに、一旦自分が心を許すとそんな顔をして来るんだもん。面白くて護ってやりたくなる！』

友達よ、護ってくれるならば、借金取りから護ってくれ！って、高校生に分際で無理でした。

「え？」

不意に現実を引き戻された私は、目の前で怪訝な顔をして私を見ているイケメンの顔が近づいていた。

「あ、すみません、ただ、ぼーっとしてただけですから」

「いえ、蓮美様？ですが、ヨダレが足れていますよ」

「え？ ヨダレですか？」

スミマセンネ。だって、こんな綺麗な顔をした男の人を拝めたのは、産まれて初めてなので……。つい、ヨダレがたれてしまったんですよ。なんて口が裂けても言えない！！でも、大丈夫です。あなたを食べたりしません。

切ない位に肩で息を吐きながら、溜息をついている私。

私は、早くこの場から一時的にでも逃げたくて、言っちゃったんだよね。

「あ、あの～。もし、お時間がかかるのであれば、早くお風呂に入りたいので、行って来ても良いですか？ 私の部屋は、此処の突き当たりです。・・・勝手に入って待ってて下さい」

あ、あ、穴があったら、入っていたい！！

もうダメよ蓮美！！ これって自爆よ！！

蓮美は鷹峰の返事も待たずに共同風呂場へ行き、使用中の札を表にぶら下げて、カギをかけるとさっさとシャワーを浴びる。

お風呂セットの中から、なけなしの金で買ったシャンプーも、もうそろそろ無くなりそうだ。ちらりとシャンプーの残量を見て、溜息をついた蓮美は、シャンプーのボトルに少し水を入れてシャカシヤカと混ぜた。ボトルので、泡がブクブク立っているのを見た蓮美は、クスツと笑った。(少しだけ、シャンプーの量が増えただけで思うだけでも、幸せを感じるな)

コンディショナーも同じ様に、水を入れて少し薄めて使っているのだ。そうでもしないと直ぐに無くなってしまふ。腰まである長い髪にシャワーの水圧を当てて、シャンプーを掌に少しだけ乗せると、グシャグシャと髪を洗い始めた。いつもなら、頭皮マッサージもするのだが、人をまたせているからと思い、早めにシャワーを切り上げた。

頭も身体も綺麗に洗った蓮美は、手早くバスタオルでゴシゴシと身体と髪の毛を拭くと、部屋着に着替えた。

蓮美は元々パジャマを着ない。それは、いつ借金取りが来るかも知れないと言う事で、いつでも外に逃げれる様に動きやすい服装をしているのだ。

「ふっさっぱりした！」

洗面器を足下において両腕を思いっきり伸ばすと、毎日の日課であるストレッチをしている。あ．．．そういや人を待たせているんだ。

このストレッチも役に立つのだ。もちろん、借金取り達から逃げる為だ！ 蓮美は、もう一つのタオルで髪を包む様に頭にタオルを巻

いた。

(ヤドカリにしか見えないわね) 鏡がわりの磨りガラスをこしに自分の姿が、ぼやけて見える。

ストレッチの途中で、急いで自分の部屋に戻ると6畳一間の部屋のドアを横にスライドさせた。

「す、すみません。おまたせしちゃって!!」

蓮美は、自分の部屋がこれほどみずばらしいと思った事はなかった。一応部屋は小綺麗に片付けてはいるが、色の褪せたカーテン、そして壊れたコタツテーブルが部屋の真ん中に置いてある。

テレビはない。だって、あるだけで視聴料とか言って貧乏人に取り立てに来る奴らが増えるからだ。それに、テレビなんて此処何年も見ないし、必要無しだからな……。

「いえ．．私が急に來てしまった事が、原因なので、どうかその様な事は仰らないで下さい」

「あ、あの〜どちら様ですか？」

そういや〜 私、この人の名前って、聞いてないな〜。

本当にこの人って、取り立て屋のボンボンじゃないわね．．．。

「そうでしたね、実は私こう言う者です」

そう言っ て見せてくれた名刺には、鷹峰 鷲一と書いてあった。

へ〜 鷲と鷹ですかあ〜。何か名前に、鶴と亀が着いているみたいで凄いわ〜。そんな事を思いながらも蓮美は、目の前のイケメンをガン見していた。しかも、パイレーツグループの専務だと書いてあった。何となくだが、嫌な予感がして来るのよね〜。

私のこの予感は、外れた試しがないのが、自慢なんだけど。今回の
は、何だが本当にヤバそう！

「あ、あのお。鷹峰さん？ 私にお話って何ですか？ まさか、
内のクソ親父が鷹峰さんにまでお金を借りたんじゃないでしょうね
？」

凄く馬鹿丁寧な言葉遣いで返して来る、この鷹峰さんって一体何
者なんだろう？ 私はそう思った。

手櫛でささつと掻き分けた髪を三つ編みしてバレッタ代わりのクリ
ップでとめた。

私の頭の中で危険信号が点滅し始めた。

「え．．．？あ、いや、そんな事ではなくて、私のご主人様が
あなたに用があるので、屋敷までご足願いたいとの事です」

「あ、良かった。だって、また借金増えていたらどうしよーかと
思っちゃったから．．．。って、まさか鷹峰さんのご主人様に内
のクソ親父がお金を借りている事なんて、あつたりしますか？」

ホツとしたのもつかの間、私の頭の中は次から次へと借金の事と
無責任親父の事で、パニックになっていた。まさかまさか、？だと
言ってくれ〜！！これ以上借金増えたら、返せないよ！！
私の必死の願いも空しく鷹峰さんは、私に言って来た。

「ええ。そうです」

「はあ？」

「その事で、蓮美様に我が主人とお話しして頂きたい所存で、こちらに参りました。では、今から行きましょう。お荷物も纏めて頂きたいのですが、よろしいですね。」

鷹峰さんからは、有無を言わさない威圧感のあるオーラが、さつきから私に、ビシバシと漂って来る。急いで荷物と教科書などを纏めてみた。元々私物なんてそんなに無いし、家に居る時はいつもジャージだったから、私服なんて言うのは、大家さんから貰ったジーンズだったり、Ｔシャツだったりする。これらの服は、全て大家サンの姪っ子の物だとか聞いている。だって、そうじゃないとサイズが合わない……。そうでないと、あの恰幅の良い大家サンの服を貰ったら、それこそ悲惨だ。それらを畳んで紙袋に入れると、本当に私って色んな人達に助けられて、此処まで生きて来れたんだと、そう思ったら涙ぐんで来た。

高校の通学用鞆と大家さんから貰った紙袋に洋服と、そして一番大事な物を本棚の奥に仕舞ってあった。小さな木箱を手を取った。これは、母さんの形見の品。どんなにお金に困っていても、これだけは売れなかった。これは、母さんと私の思い出の品物だからだ。

薄汚れた桐の小箱には、黒い漆喰でその上には右に極楽鳥、左には何かを掴んでいる双頭の鷲の姿が描かれているが、その絵さえも年代物のせいか禿げかかっている。母さんは常々私に言っただけで聞かせていた。

『これは、開かずの箱なの。この箱が開く時は、蓮美に取って幸運が来た時だけよ。だから、これは絶対に売らないでね。約束よ』

『うん。母さん。蓮美、大事にするよ。だから、早く良くなってね』

小さな頃の思い出がすぐに蘇って来る。古ぼけた小さな箱を抱き締める様にして蓮、美は立っていた。大事そうに小さな箱を紙袋の中に入れると、蓮美は鷹峰に向き直った。

「鷹峰さん。お待たせしました」

「荷物はそれで全部ですか？」

「はい。元々そんなに物は無いですから」

だって、制服は畳むと皺になっちゃうから、こんな風に着ていくしか無いのよね。でも、今からイギリスってどう言う事よ？ もう、夜よ！ ま、まさか私を手籠めになんて考えてんじゃないんか？

このロリコンイケメンは！

蓮美がそんな事を考えていると、クスツと鷹峰に鼻で笑われた。

「へ？」

「すみません。実はね、空港近くのホテルに部屋を用意させましたので、今夜はそちらにお泊り下さい」

キラリと光る銀縁メガネが 少し色っぽく見えたのは、気のせいだろうか？ 蓮美は、自分の胸の鼓動が高鳴るのを 必死で押さえていた。

お、お母さん！ 蓮美！ 絶体絶命です！！

9 (改) (後書き)

少し終わりの方を変更しました。

蓮美は、自分の部屋の電気の紐を引っ張って、消した。

（お母さん。私これから、どうなるのかな・・・）

だって、これから空港近くのホテルに連れて行かれる事になったるし・・・。そんな事なら、お風呂に入る前に言っただけで欲しかった。水道代だって、浮くし。思いつきりシャンプーやコンディショナーも使えるし・・・とそんな事を考えていた蓮美は、いつの間にか自分の手をにぎにぎとしている鷹峰を見て、後にぶっ飛んだ。

「な、何をするんですか！」

「いや、まだかなって思いましたね」

こ、この人つてば、人の反応で遊んでいる。

お母さん！ 蓮美は、どうなるんでしょうか！ 身売りなんですか？ それとも手籠めなんですか？

不安で胸が押しつぶされそうになっている蓮美は、ただ黙って薄暗くなつた自分の部屋を見渡した。蓮美は、16年間お世話になつたこの部屋に、深々と頭を下げると、「お母さん、行ってきます。」

これからどうなるか分からないけど、見守って・・・。「そう呟いた。

そんな蓮美を部屋の戸口から、じっと見ていた鷹峰は、何も言わずに立っていた。

いつも強がりな蓮美の目から、涙がジワリと溢れて来る。絶対に泣かない！ これは、死んだ母さんとの約束だったから。泣きそうな時には、必ず上を見上げる。そうすれば、涙は溢れないから、泣いた事にはならない。

部屋の引き戸を閉め、豆電球の明かりが揺れている廊下を静々と歩いて行く2人。

このアパートは、二階建ての建物で、大家さんの家は一階。そして他の三件（室）は、アパートとして貸しているのだ。二階にある蓮見達の部屋に行くには、外の階段を上がって廊下に行く。

蓮美は、この階段や廊下での思い出が蘇って来る。幼い頃の自分が母さんの帰りを今か今かと待っていたあの頃。赤いランドセルを背負って、捨てられた子犬みたいな目をして母さんの帰りをずっと待っていた。いつも、大家さんが蓮美を連れて自分の家に招き入れてくれていた。

蓮美は、泣きそうな顔で そんな思い出の場所である この廊下の壁や手すりをそつと手で摩っている。

この間も、鷹峰は何も言わずに蓮美の側で、蓮美が動くまで待っていてくれた。蓮美が顔を上げるとにっこり微笑んで鷹峰の方を振り返った。

「ありがとうございます。もう、大丈夫です。吹っ切れましたから

」

制服の裾が風にあおられない様に、手で制服のスカートを押さえながら外階段を目指して行く。

階段をカンカンと音を響かせて下りて行く蓮美と鷹峰。 そんな2人を大家さんが心配そうな顔で見送ってくれた。

「蓮美ちゃん．．．いつでも戻って来てね。おばさん、待っているから。」

「う．．うん。大家さんいつもありがとう．．．。クソ親父が

帰って来たら、縛って置いてね」

大家さんは、目尻に涙を溜めながらニツコリ笑うと「あいよ。正雄ちゃんをちゃんと逃げ出さない様に捕まえとくよ」

「うん。じゃあ。お世話になりました」

深々と頭を下げた蓮美は、鷹峰に促される様に黒塗りのベンツの後部座席に乘せられた。鷹峰も蓮美の隣に座って来た。車のドアが運転手の人に寄って、ボタンと閉められると蓮美は、後を振り返っていた。人に弱みを見せちゃダメ。そう自分に言い聞かせていた蓮美だったが、涙が頬を伝って来る。誰にも見られない様に隠れて涙を拭くと、蓮美はこれから自分は一体どうなるのだろうか？と不安になって来た。

「あ、あのおくこれから、どちらへ向うんですか？」

「空港です。蓮美さまは、パスポートとかお持ちでは無かったのだからこちらで作らせました」

「はあ．．．あ？！パスポート？！それって、滅茶苦茶お金かかるじゃないですか？！」

「ええ。そうですね。ですが。私のご主人様は、今イギリスにいらつしゃいますので、パスポートが無いと無理ですからね。その辺は弁護士を使いましたので安心して下さい。10年用を作らせて頂きましたから。ちなみにパスポートはこちらで預らせて頂きますので、その事はご了承下さい」

ニツコリと鷹峰さんに微笑まれて胸に手を当ててお辞儀をされると、

もう蓮美は何も言えなくなった。

「ええ。そうですね。ですが。私のご主人様は、今イギリスにいらつしやいますので、パスポートが無いと無理ですからね。その辺は弁護士を使いましたので安心して下さい。10年用を作らせて頂きましたから。ちなみにパスポートはこちらで預からせて頂きますので、その事はご了承下さい」

蓮美は、必死で色々と思い出して来た。確か、この人は私に言っていたわよね……。空港近くのホテルに私を泊まらせるって……。ホテルに着いたら逃げよう！それしかない！

これって、私は売られるって事なのかしら……。蓮美の頭の中ではドナドナの曲が、ノンストップで流れてる。そして、蓮美は昔大家さんの所で見た映画を思い出していた。「野麦峠」私もそんな風に、一生何処かで、今以上に馬車馬の如く働かされるんだわ！きつと……。でも、ちよつと待って、確か日本じゃないって言うていたわね。海外にも野麦峠はあるのかしら？こんな事を友達の裕子に聞いたたら、恐らくハリセンが飛んで来るのだろう。だが、至って本人は真剣だ。

この日は鷹峰さんの言葉通りに空港近くのホテルに泊まった。あまりにも広いホテルの部屋に、私は口をあぐりと開けていた。だって、このホテルの部屋ってば、私のアパートの部屋よりも広いし、綺麗！（って、当たり前か！もし同じくらいだったら、商売にはならないものね）

思わず自分で自分に突っ込んでしまった。広いベッドを見て感動！綺麗なバスルームを見てまたまた感動！

さつき、家で入って来たばかりだと言うのに、「鷹峰さん、お風呂入って来てても良いですか？」思わず大きな声で聞いてしまった。緊張している私に鷹峰さんは、ただ笑顔で頷くとドアを閉めて出て行った。

「あれ？ 何か肩すかしにあつたのかな？」

思わず、ドアを開けると鷹峰さんが別の部屋に入ろうとしているのを見た。彼は、私が見ているのを知って、立ち止まると「どうかされたのですか？」と聞いて来た。

「い、いえ．．．べ、別に何でもありません。お、お休みなさい！」

顔から火が出る思いで、さっさと部屋に入った蓮美は、ドアに寄っかかる感じで立っていると、緊張で足がガクガクしてきた。

な、なんだ．．．。全て私の思い過ぎだったのね。なら、安心してお風呂に入らなきゃ．．．。

天国のような湯船を堪能した後、気持ちを180度切り替えた蓮美は、ふかふかのタオルで頬を撫でていた。

初めてのスイートルームを満喫した蓮美は、アメニティグッズをしこたまバツクの中に詰め込んでいたのだった。

「こんなフカフカのベッドで寝る事なんて、一生無いと思っていたけど、生きてみるもんね」

そう言うと、蓮美はフカフカのベッドの上で、飛んだり跳ねたり、でんぐり返しをしたり、大はしゃぎだった。

そんな事をしているうちに、睡魔が蓮美を覆うと、吸い込まれる様に眠ってしまった。

朝、目を覚ました蓮美は、いつもの様くせでバタバタと新聞配達に出かける用意をしていた。

顔をパジャマ代わりの服に、ジャージとＴシャツを着て、さあ外に出ようとしていた時に、ハッと気がついた。

「此処は、何処？ 私は．．．だれ？ って言いたい．．．」

漸く、昨夜からこのホテルに泊まっている事を思い出した蓮美は、

「あ！手籠めにされる！！」と叫んでいた。

「お、落ち着け．．．落ち着け私。 よく考えてみたら、もし鷹峰さんに手籠めにされるんだった、もうされてるわきつと．．．。じゃあ！これからな訳？ え〜！ やっぱ、あの人口リコンだわ！ イケメン口リコン！！ 早く逃げなきゃ！！」

そうやって、部屋でアタフタしていると部屋のドアをノックする音が聞こえて来た。

コンコン

優しいけど、その音の中に無視するなよな！ って言う気配が入っているのは、気のせいでしょうか．．．？

恐る恐る、ドアを開けた蓮美の目の前には、鷹峰さんが立っていた。急いでドアを閉めようとすると、さっと自分の足をドアの隙間に入れて来た鷹峰さんの行動に驚いてしまったワタシ。

な、何これ．．．。 やっぱ、私ってば、絶体絶命なんじゃん！！

お、お母さん〜！！ 先立つ不孝をお許し下さい〜！！

（ダメだよ、母さんは、もう既に死んでるでしょ！）なんて自分で

突っ込んでみた。

「蓮美様。これから、空港へと向うのですが、何処か行かれないとこはありますか？」

「はい」

まさか、家に帰りたいたいと言ったら、殺されるかも知れない……。命は惜しいし、だって、まだ恋もした事無いのよ！ 貧乏暇無しで忙しかったからな……。だけど、最後に裕子にさよならを言いたい……。それぐらいは、出来るよね。

「鷹峰さん？ あの、高校に行きたいのです、が……。だって、これから海外に行くんでしょ？なら、休学の手続きも取らなくちゃならないし……。」

鷹峰さんは、カーテンを開けると窓の外をじっと見ていた。

なんだか、それだけなのに私は一枚の絵画を見ているような気分になった。

あれ？この人つてば、私が言っている事をちゃんと聞いてるのかしら？

「あ、あの、鷹峰さん？聞いてますか？」

その時、キラツと向かいのビルの屋上で何かが光ったのが見えた。

それに気付いた鷹峰さんは、私を抱き寄せると床に突っ伏した。私は驚いて声を上げた。

「た、鷹峰さん！！ 私を食べても美味しく無いです！！」

パシユパシユパシユ！と言う音と共に大きな窓ガラスが音を立てて割れ始めた。窓ガラスの破片が色々な所に飛び散って行く。私は、頭を抑えると震えながら叫んでいた。

「きゃあああああ！！」

私は、鷹峰さんに護られる様に床の上で抱き締められた。

「チツ！しまった、もう気付かれたのか・・・」

「え？ 気付かれたって？」

「蓮美様。高校には挨拶をするだけでしたら、行きましょう」

高校へ向う車の中で、私はとても嬉しくて浮かれていた。空港に行く前に、高校に寄ってもらった。鷹峰さんから、高校には、休学届けを出しておいた方が良いでしょうと言われていたからだ。それを聞いた時に、蓮美はその間に私は一体どんな事をされるのかしら？と顔を少し引き攣らせていた。

さっきのホテルでの襲撃といい。一体、私はどんな世界に足を突っ込んでしまったのかしら・・・。。
お母さん！教えてよ！！

高校に着くと、早速休学届けを出して、校長と話を済ませると私は校庭から、裕子の姿を探した。

「最後に裕子にサヨナラを言いたかったな。裕子・・・」

蓮美が呟くと、自分のクラスの窓ガラスを勢い良く開ける音が聞こえた。

「ー！ 蓮美！」

「裕子！ 今までありがとうー！」

笑ってサヨナラをする筈だったのに、涙が流れて来そうになった。鼻がつーんとして来た。泣いちゃダメ。いつも笑顔で人を迎えましようね。 母さんの声が聞こえる。

黒塗りの車の後部座席のドアを運転手さんが開けると、蓮美は運転手さんにお礼を言って車の中にはいった。

「蓮美様。今から空港へ行きますから。宜しいですね？」

一応疑問系で聞いて来る鷹峰さんの言葉には、齒向かうなよって言う言葉が入っている気がする。車は、高速に乗ると私が生まれ育った街なんかすぐに見えなくなってしまった。

「空港？イギリス？って事は、飛行機に乗るわけ？
鉄の塊が空を飛ぶの？」

今まで、蓮美は現実逃避をしていたので、何をしていたのかも、何を鷹峰から言われていたのかも思い出せないでいた。
無情にも車は、空港と言われる所に着いた。蓮美は、きよろきよろと周りを見出した。

「どうされたのですか？」

「うつん。ただ、『まほろば』のマスターやエイミー、そして源さん達にお別れを言っていなかったから……」

蓮美の大好きな人達で、ダメ親父よりも頼れるとても素晴らしい人達。だからこそ、お別れはきちんと面と向って言いたかった。蓮美は、唇をキュツと締めると泣きそうになるのを押さえていた。

「そうでしたか……。では、彼らに手紙を書かれては、どうですか？こちらのお店にハガキも売っておりますから。蓮見様の好きな物をお選び下さい」

「好きな物？ですか……」

そう言われてみれば、蓮美は好きな物って言うのではない。物には執着しない質だったし、そんな事に使うようなお金なんて無かったからな……。

徐に、蓮美は紙袋の中からカードを取り出した。それは、三枚だけ

だったが、蓮美が自分で作った紙だった。

切手を二枚鷹峰さんに買ってもらった蓮美は、カードに『まほろば』の住所を書き込むと裏側に、くそ親父の尻拭いをまたさせられることになったと書き込んだ。帰って来た時には、また働かせて欲しいという事と書き込んでいると涙がじわつと出て来た。

みんなの優しい笑顔が次々と頭の中に浮かんで来る…。ヤバイ、私泣きそうだ。時折、蓮美が書いているペンが、動きを止める。

（無理だよ…。皆にさよならって言ってないのに、こんな形でバイバイって言わなきゃいけないなんて…）

ポロポロと涙が頬を伝って鼻の頭から手紙の上に落ちる。泣いている所なんて、他の人には見られたくなくて、涙を拭いた後で少し大げさに欠伸をした。

他人に自分の弱い所なんて見せたく無い。

『まほろば』の常連客の源さんにも手紙を書いて、鷹峰さんにカードを渡した。

「何処にポストがあるのか分からないんですけど…」

そんな蓮美の心配を他所にお店の人が「此処のお店からでも、手紙は出せるのよ」と教えてくれた。

「へえ〜そうなんですかあ」

思わず関心してしまった蓮美にお店の人は、蓮美と鷹峰さんを見て「恋人同士なの？素敵な彼ね」そう言って笑っていた。

確かに言われれば鷹峰さんって背も高いし、着て居る物も結構なブランド物なんだろうな。それに比べて私って一体何なんだろう？鏡に映る自分と鷹峰さんの姿を見比べてみる。

鷹峰さんは、まるで王子様と言うか騎士様って感じた。今の私の

姿は高校の制服を着ている。これしかちゃんとした洋服がないからだ。後はジャージだけだから。しかもポケットが着いているヤツ！これは必需品！！

干物女と言われ様が、私にはこれが一番似合うと思っっている。しかも胸も張って言える！

『あんただけだよ。そんな事言っっているのは…』

一度、友達の裕子にそんな事を言ったら、呆れられた。

「鷹峰さん。あなたのご主人様って、何がお好きなんですか？ 日本のお物を少し持って行きたいけど…何が良いのかしら？」

少し可愛く首を傾げる様に悩殺って感じで、笑顔も入れて鷹峰さんに聞いてみた。

ピクツと彼の綺麗な眉と頬が動いたように見えた。

「蓮美様。私のご主人様は、蓮見様のそのお心遣いだけで、心が満たされるとおっしゃっていました」

「はあ」

お土産買っフリで逃げようと思っっていたけど、それすらも無理って事ね。 鷹峰さん確かにあなた出来る人だわ…。

何とか鷹峰から逃げようと、蓮美は椅子に座って考えていた。

（あ！ そうよ！ トイレよ！！ トイレに行くフリをして、逃げれば良いんじゃないの！ なんて簡単な事を考えなかったのかしら？）

蓮美が、さっと椅子から立ち上がると、鷹峰だけじゃなく自分達の周りにいた20人程の人間も一斉に立ち上がった。

その状況を見て、蓮美は冷や汗を掻きながらも、椅子から離れようと数歩歩き出した。

すると、鷹峰が蓮美の腕を掴むと椅子に引き戻した。

「い、痛い！ 何をするんですか?!」

「何処に行こうとしているんですか？」

「トイレに決まっているでしょ！ わ、私は、今日突然アノ日になっちゃったんだから、色々と女の子用の物を買わなきゃいけないし、それに・・・それに・・・と、トイレにだって行かないと・・・たい、大変な事になっちゃうんだから！」

真っ赤な顔をして鷹峰に向かって早口で言っけて来る蓮美は、必死だった。

そんな蓮美の様子を見て、鷹峰も少し顔を赤くすると「分かりました。では、初めに売店、そしてトイレまで、蓮美様を案内致しますよう」

「へ？」

な、なんで案内するの？ 私は子供じゃなんだから、一人で行ける

に決まってるでしょ！

鷹峰の言葉に蓮美は、溜息しか出なかった。

（勘弁してよ〜！ 私の目はダイヤモンドで出来てるわけでもないのよ！ 普通の目よ！それに、普通の女子高生なんだから！）

「あ、あの〜。出発時間は何時ですか？」

「後、そうですね〜1時間あるかないかくらいですね」

「それまでに戻ってくれば良いんでしょ？」

「ええ。基本的にはそうですね。方向音痴なのではないのですか？」

「いいえ。大丈夫です。では、トイレに行つて来ます！」

そう蓮美は鷹峰に言うと、走って売店まで行つた。それから、売店が混んでいるのを見計らつて生理用品を見ながらチラチラと周りを見渡した。

チツ！着いて来てやがる！つたく、それなら売店では普通に生理用品を買つてみるか。

そう決めると、生理用品を持って、レジに並んだ。レジの人に「何だが、変なストーリーカーに着けられているんです〜。掴まる前に、逃げたいんですけど近くにトイレから裏口に逃げれる所つてありませんか？」

蓮美は、不安そうな顔で女性店員にそう言うと、彼女は蓮美を見ながら囁いた。

「右に4人。お店の向かい側のマツクに3人こつちを向いてみてるから、そうみたいね。良いわよ助けてあげる。これを使ってね」そう言われて渡されたのが、カードキーだった。

彼女は、目配せをすると小声で、教えてくれた。「棚の後が隠し扉

になつていて、そこから従業員用のトイレに繋がっているわよ。そのトイレからだつたら、外に出られるわ」

「お待ちせ致しました。680円になります。はい、丁度ですね。ありがとうございます」

そう言うと店員は「次の方どうぞ！」と大きな声で言うと、客が驚いてレジ近くに並べてあつたお土産用のチョコと飴が、棚から落ちて行つた。他の客達も驚いて、その事に注目していた。その隙に蓮美はさつさと店の隠し扉をカードキーで開けると、中に隠れた。（今の私の頭の中には、007のテーマソングが流れている。

うわ〜これって、カツコイイ〜かも〜!!）

高校の制服を着たままだつたと言う事もあるし、何処かで着替えないと……。そう思った蓮美は、従業員の制服が置いてある棚を見つけた。自分の服のサイズを見つけると、高校の制服を脱ぎ、上は白と黒の縦縞が入ったカッターシャツを着て、下は黒のロングパンツを履いた。靴はこの際今までのローファーで良いとして……。蓮美は、早鐘の様になり出す心臓を落ち着かせる為に深呼吸をした。

長い髪の毛は、反って追つ手に見つかりやすい。だから、ナイフかはさみがあつたら、それでバツサリと切るうかと思つた。だが、こんな時に限つて探している物は見つからない。仕方無いから、髪を纏めて少し大きな帽子の中に入れた。帽子から髪が出ていないか、鏡の前に立つて何度もチェックしていた。

早く、早く逃げなきゃ！蓮美は走つて従業員用の女子トイレに向つた。壁にかけられている時計を見ると胸を撫で下ろした。後45分しかない。早く空港から逃げないと！

蓮美は、トイレのドアを開けると走つて窓を探した。少し高い位置にあるが、確かにここから逃げ出せるくらい大きな窓がある。しかも、少し開いている。少し窓のへりまで飛び上がった蓮美は、

足を引っかけて外に出ようとした。その時、廊下から大勢の人間が走って来る足音が聞こえて来る。蓮美は窓から身を乗り出すと、窓の外へ身を出した。外に出たのは良いけど、このトイレって3階にあったのね。

落ちない様に身をかがめた。

ガラ！ツと音を立てて、勢い良く蓮美が抜け出した窓が開いた。見つかるかも！そう思って、蓮美は壁づたいに狭い足場を横に移動しながら、窓から死角になる反対側の壁の向こうへと身体を移動させた。夜と言う事もあり、簡単には闇が蓮美の味方をしていくれたようだ。

蓮美を追いかけて来た黒服の男達は、口々に携帯で誰かに連絡を取っていた。

「申し訳ございません！蓮美様を見失いました」

蓮美は、三階から、隣の建物に飛び移ると空き部屋を見つけると、そこに窓にカギがかかっていないのを確認すると、窓から部屋の中に忍び込んだ。

真っ暗な部屋には、誰も人の気配がしない。

<エール航空804便の搭乗手続きを開始致します>

アナウンスを聞いて、思わず時計を見た蓮美は、ほつと胸を撫で下ろしていた。あれからもう既に2時間が経っている。チケットが取ってあったイギリス行きの飛行機は、もうすでに空の上だし、良かった……。これで、野麦峠から逃れられる……。蓮美は、目を閉じたまま、にっこりと微笑んだ。

「蓮美様。困りますね」

バリトンの声が聞こえた。これって誰？蓮美が目を冷ますと鷹峰が目の前に立っていた。

「一体どう言う事なのか、説明して頂きましょうかね。蓮美様」

「あ、あの〜？ どう言う事でしょうか？ 人違いです」

蓮美は冷や汗を流しながら、後に後ずさりをしている。まさか、本当に鷹峰さんなの？なら、どうやって此処に来たわけ？

「蓮美様！あなたがお逃げになる度に、一人ずつ命を落とさなければ、お分かりにならないようですね」

ひょえ〜！！ゴッドファーザーの世界だよ！！

急いで、逃げようとした途端、蓮美の背中に激痛が走った。蓮美は自分の膝がかくんとなって、ゆっくりと床に倒れそうになった。蓮美の背後には、肩で息をしている鷹峰が立っていた。

「全く、あなたと言う人は……。あなたのその無茶な行動のお陰で、どれだけの人の命が消されるのか、分かっているのですか？」

床に倒れている蓮美を見て、鷹峰は大きく溜息をついた。

「あのお方の命令に背く事は、誰にも許されないので。あなたには、必ずイギリスへ行っていたいただきますから」

そんな鷹峰の言葉など、露知らず蓮美は、床に倒れたまま目を閉じている。足や、手を勝手に動かされているような気もする……。母

さんの夢を見ながら、遠い記憶の彼方へいざなっていた。急に、鼻にツンと来る匂いを嗅がせられて、しかめっ面をすると目を覚ました蓮美の前には、不機嫌を絵に描いたような顔をした鷹峰が、こちらを睨んでいた。

「ん．．．ん？ 野麦峠から、逃れられたのかしら？」

「何を言っているのですか。蓮美様」

（あ、鷹峰さんってば、やっぱり怒ってるのかしら．．．？あと、私の洋服が元の高校の制服に変わっているのは、何故？ これって、多分．．．。いや、恐ろしい事は考えちゃダメよ蓮美！ そんな事なんてないわよ）

人間、恐ろしいもの程見なくなるし、聞きたくなる。それは、蓮美もそうだった。

「あ、あの．．．鷹峰さん？ 私、どうして高校の制服を着て居るのかしら？」

ムスツとした顔で足を組み直す鷹峰が、コーヒーを飲みながら蓮美を一瞥した。

「ああ。それなら、私が蓮美様の洋服を着替えさせましたが、どうかしましたか？」

それを聞いた蓮美は、30分の間 灰の様になっていた。

（わ、ワタシ．．．。お嫁に行けません．．．。お母さん、先立つ不孝をお許し下さい）

空港内にアナウンスが流れた。

どうやらヨーロッパ行き飛行機の搭乗手続きを始めたようだ。鷹峰さんに捕えられた私も其処へ連れて行かれるんだ。仕方無くスタスタと歩く私の腕を鷹峰さんが、ぐいっと引っ張った。何処に連れて行くのよ！ しかも、手をしっかりと握られて。

「た、鷹峰さん。ワタシ オトイレ イキタイデス」

鷹峰さんの怒りのドス黒いオーラが漂って来た。

「良いですよ。ただし、私も一緒に行きましょう」

「は？ 女子トイレですよ！ 鷹峰さんも一緒って、それって変です！ 変態です！」

必死になって、私はここから逃げる為の作戦を考えていた。トイレに行く作戦も無理なのか……。ならば、気分が悪くなる作戦はどうだろうか？ ま、待てよ。幾ら鷹峰さんでも、本気で女子トイレに入ろうだなんて考えるわけないわ！ ならば、本当に女子トイレに入って頂きましょう！

蓮美は、心の中でニヤリと笑った。

「……でも、本当に行きたいので、鷹峰さんさえ良ければ良いですよ。恥ずかしいですけど……」

蓮美は、俯いて少し頬を染めた。

と言う事で、今 私は空港のトイレにまた来ている。今は、お昼時

で、他の女性客も居ると言う事で流石の鷹峰さんも此処までは入って来なかった。

トイレを済ませた私は、自分が入っている個室トイレの天井を見上げた。其処には通風口がある。これを利用しない手は無い。鷹峰さんが私をゴッドファーザーの世界に身売りさせようとしているのは、知っているけど。だけど、私はそんなの真っ平ゴメンだわ！貧乏でも、平和に暮らしたいのよ！

だって、安全第一ですから！

「あら〜よつと〜！」

蓮美は、ローファアの靴の中敷きにしこんでいたネズミ花火をビニール袋から取り出した。こう言う物は、以前クソ親父が一度家に帰って来た時に、学校帰りの私と鉢合わせして慌てて逃げようとした時に、使った物だ。その時は、取り立て屋もいたから、ネズミ花火と爆竹の音で、近所の人から「発砲事件よ！」と騒がれ警察まで出勤する程の騒ぎになった。軽くトイレの便座から天井に近い通気口の入り口に手をかけると、同時に火のついたネズミ花火を床に落とす。

バチバチバチバチ！！

蓮美が床に投げたネズミ花火は、3つだった。入り口近くと手洗いの近く、そして自分の目の前のトイレ。

（知ってんだからね！私に女性の護衛を着けている事くらい、私が知らないとも思っているのかしら？ 飛んだ、抜け策だわ！ さらば！ メガネのイケメンロリコンさん！）

心の中で鷹峰に対して悪態をついていた蓮美は、さっさと通気口の中へ身体をくねらせて行った。

蓮美が仕掛けたトラップで、女子トイレの中では大騒ぎになっていた。蓮美が睨んでいた通り、蓮美が入っていたトイレの真向かいに入っていたのは、蓮美用の護衛だった。

彼女は、いきなり自分のトイレにネズミ花火が投げ込まれて、パニックになっていた。

急いで、トイレから出てみれば、辺りはネズミ花火からの煙で白く煙っていた。

これでは、蓮美様の無事が確認出来ない！ そう思った時に、「まさか！！ この騒ぎは、蓮美様がご自分でされたのでは……！」

早く鷹峰様に連絡をしないと！」そう呟いた女の手には、携帯電話が握られていた。通気口から蓮美は、匍匐前進ほふくぜんしんをしながら、頭の中で、この通気口が何処を通れば抜けるのかを辿っていた。

鷹峰に掴まる前に一度売店から従業員用の通路を通った時に、建物内の見取り図を見てしっかりと記憶していた蓮美。ニヤリと笑った蓮美は、通風口の中から鷹峰が一体どんな顔をしているのかを想像していた。

（確か、このまま前進して5メートルしたら、三股に別れるから、そこを確か左に行けば売店。右に行けば、外に出れる筈！真ん中は別のトイレに繋がる。だったら、右に行くと見せかけて、やっぱり別の階のトイレに繋がる通路を選ぶしかなさそうだわ。でないか、あの頭の切れる鷹峰さんにまた掴まるから……）

絶対に野麦峠だけは、避けたいんだもん！

後、鷹峰さんに手籠めだけは、絶対に嫌だわ！

鼻息も荒く、匍匐前進ほふくぜんしんにも勢いがついて来た。

トイレでの騒ぎが起こる少し前、鷹峰は女子トイレの前の通路側の壁に寄りかかって立っていると、溜息をついた。

流石に、トイレからは逃げられるわけ無いだろう。そう鷹を括った鷹峰は、煙草を吸いに喫煙室の方へ向った。煙草は当の昔に禁煙していたが、今日は朝から八プニング続きでイライラしてる。自分を落ち着かせる為にも久しぶりに煙草を一本取り出すと口に銜えた。

（何だつて、あんなお転婆なお嬢さんなんだ？ 彼女は、自分が命を狙われている事など知らないのか？

昨夜のホテルでは、逃げなかったのに、どうして今になってしかもこの空港で俺から逃げようなどとするんだ？

しかも、見張りに付けておいた黒服の尾行隊までも、振り切って逃げるとは……。

此処まで来ると、流石にあのお方の血筋だと感心させられる。

表の世界では、貴族と言われているあの方。だが、裏の世界では何百人ものマフィア達を束ねるゴッドファーザー。蓮美様を早くあのお方の元へ連れて行かないと……こっちの身がヤバイ。）

苛立つ鷹峰は、自分の携帯が鳴り始めたのを見ると着信画像をチェックした。

自分がさつき蓮美様を監視させる為に、女子トイレに行かせた女のSPからだった。口に加えていた煙草をシユガレットケースの中にししまうと、走って女子トイレがある方向へ向かった。トイレから慌てた女性達が、我先にと出て行くのを見た鷹峰は、顔を青ざめた。一体何阿あつたんだ？

「鷹峰様。す、すみません！ 蓮美様を見失いました。」

慌てた様に言い出す彼女に「何があつたんだ？」そう問いたただすと、何でもいきなりネズミ花火が自分のトイレの個室に投げ込まれたと

言っていた。トイレ中に煙が充満していて、スプリンクラーが作動していた。床には、後二つのネズミ花火が落ちていた。

「やられた．．．。蓮美様だ」

まさか、こんな大胆な事をされるとは思っても見なかった．．．。

鷹峰は、蓮美が入ったと言われるトイレの天井に注目した。そこには、通風口があった。

「おい！ 通風口だ！お前達、ここの建物の通風口が何処に繋がっているのかを今直ぐに調べるんだ！」

俺は、他のSPや黒服達に命令すると彼らは方々に散らばって行った。10分程立った頃に、俺の携帯にこの建物の見取り図が送られて来た。それをじっと見つめる鷹峰は、今自分が立っているトイレの通風口を睨んだ。

（どうやら、彼処から外へ抜け出せるようだな．．．。いや、待てよ。それじゃあ、さっきと同じ様に捕まえて下さいと言わんばかりだ。なら、多分あそこだ！）

俺は何人かの黒服達を引き連れて、走り出すと他の階の売店に立ち寄った。ここには、洋服なんかも売ってある。蓮美様の事だ、此処で買わずににして、何処で着替えると言うんだ。店員に蓮美様の顔写真を見せると店員は「いいえ。そのようなお客様はこちらには来ていらっしやいせんが．．．」そう返して来る。

ならば、この階のトイレに居るんだろう。全く、なんて頭の切れるお嬢様だ。俺は、上着を脱ぐと側にいた黒服の一人に投げた。

「た、鷹峰様 ？！」

「あのお転婆姫を連れ戻す。蓮美様は、この階に絶対にいるはずだ。例え掃除婦であろうが、引き止めて顔を見せてもらえ！分かったな！」

「……はい！」「……」

俺は、女子トイレに入ると蓮美様の制服にあらかじめ付けておいた迷子機能を発動させた。いきなり奥のトイレの個室からピロロロロロ〜！！と言う音が聞こえた。その音にビクついたのが、女がその個室から慌てて出て来た。

音の発信源に近づくと、紙袋の中に制服が入っていた。

チツと俺は舌打をすると、迷子機能を解除させると同時に、その紙袋を持って女子トイレから出た。トイレの出口には人だかりになっていて、俺は空港の警察職員に呼び止められた。

警察官に、俺の身元を確認する物を見せると、彼らは、敬礼して「お手数をおかけしました！」そう言うと蜘蛛の子を散らす様に走り去った。

俺は、その時に気がついた。何処かで蓮美様がこの状況を見ているとすれば、顔が分からない様に何かかぶり物をするしかない……。
俺の視界に、映るのは薬局でピンクのウサギの着ぐるみを着て、風船やビラ配りをしている。俺が、そいつをじっと見れば見る程、ヤツは動揺しているのか、持っていた風船を全て手放してしまった。

「げ！見られた！！！」

確かに今の声は、蓮美様の声だ！

「蓮美様！もう、観念して下さい！」

ピンクのウサギの着ぐるみは、急いで走っているのだろうが、足がもたついて途中で瘦けてた。なんてドジなウサギなんだろう。俺は、顔を引き攣らせながらも、ウサギの着ぐるみの頭を取り外した。そこには、汗だくの蓮美様が息を切らせながら「あーあ。掴まっちゃった・・・」そう言っつてグツタリされていた。

俺には、分からない。何故、蓮美様が其処までして逃げ出すのか。それに、蓮美様が仰っていた『野麦峠』の意味も分からない。蓮美様を抱き上げるとすぐに空港内に用意された部屋で、制服に着替えさせた。

その間も蓮美様の口から出て来る言葉は、意味不明な物だった。

「手籠めは、嫌だ・・・。イケメンロリコンも嫌だ・・・。野麦峠も嫌だ・・・。」

出国予定時刻よりも4時間オーバーしてしまった。流石の俺も、もう溜息しか出て来ない。余程俺から逃げ回って疲れたのか、スウと寝息を立てている蓮美様の顔を俺は、じっと見つめた。

蓮美様は狸寝入りだ。

其処で、俺は蓮美様に飛行機の用意が出来た事を告げると、蓮美様は眠ったフリをしながらも、肩をビクンと震わせた。

俺は、もう逃がさない。

14 (後書き)

野麦峠

昔一貧しい農村の娘達は、売られたり、働きに出る為に紡績工場に連れて行かれるお話です。その時に娘達に通らなくてはならないのが、野麦峠。

折角逃げ切ったのに、またしても掴まってしまった。本当にこの人は頭が切れる人なんだわ。通風口を通って、別の階のトイレに通じる道を選んだのが、そもそも間違いだったのかも知れないわ。

別の階のトイレに天井から下りた時、丁度掃除の時間だったらしく、誰もトイレには入っていなかったから、助かったわ。急いで制服を脱ごうと思ったら、スカートに何か光ってるじゃないの！！

あゝスケベ　ロリコン　イケメンめ！でも、これってGPS機能とかは着いていないみたいだから、恐らく迷子用かな？なら、此処において、制服の下に着ていたTシャツとマイクロミニにしか見えないスパッツを引き下げると、ジャーンちよつとしたサブリーナパンツに早変わり！

こちらら、毎日と言うか、毎週のように借金取りから逃げ回ってんだから、そんな知恵くらい嫌でも着くわよ。

トイレから出ると、制服は、掃除道具入れの扉を開けると、其処に大きめの紙バッグがあった。それに制服を畳んでいれると、自分がさっきまでいたトイレの個室にそつと置いて、私は逃げたのだ。

近くの薬屋で、「あんた、バイトのコだろう？　丁度良かった！これを着ておくれよ」そう言われて、着ぐるみを着る事になったのだ。ラッキー？と思ったけど、これがなかなか熱い。幾ら冷房が効いている空港内の施設でも、着ぐるみで動き回るのは、地獄を見る様に熱くなって来た。頭がフラフラになりそうになった時に、鷹峰さんと目があってしまった。右手に掴んでいた風船の紐が、緊張と恐怖で手からするりと離れて行く。その様子を見ていた子供達が、「あ！風船が飛んでるよ！」なんて大声出すから、見つかったまじやねーか！

どんどんこつちに近づいて来る……。バレるかも……。！
そう思ったら、居ても立っても入れずに私は、走り出した。左手に

持っていたビラをその辺にまき散らし、走れるだけ走った。ただ、この着ぐるみって走りにくいよね。

足が纏れて、びったくと床に倒れてしまったよ。ついには、ウサギの頭を鷹峰さんに取られてしまった。

ぐったりした私は、鷹峰さんの腕の中で仮眠を取る事にした。

うつすらと目を開けたら、私の着ぐるみは剥がされていて、また高校の制服に着替えさせられていた。

その上、私は鷹峰さんの膝の上に抱っこされたままなのです。

あの～鷹峰さん、あなたは羞恥プレイをやっているのですか？

鷹峰さんは、私が寝てるものだと思って、私に声をかけて来た。

「蓮見様と私はプライベートジェットでの移動となりますので、こちらです」

鷹峰さんの言葉を聞いて、思わず私は飛び起きた。そんな私を見た鷹峰さんは「では参りましょう」そう言うと私を膝の上から下ろしてくれた。

「えええ？ぶ、ぶ、ぶ、プライベートジェットですか？」

アンタ一体何者よ！って思わず言いたくなった私。大体、この鷹峰さんのご主人様って一体何者なのかしら？ 一度その事を鷹峰さんに聞いたけど、『それは、蓮美様ご自身が、ご主人様にお会いになってから、ご本人に直接お聞き下さい』と完全にスルーされた。それって、イギリスに行けって言っているのよね。

「はい。では参りましょう」

スタスタと前を歩いてく鷹峰さんの後をチョコマかと着いて行く私は、身長が150？しかない。これはどう見ても小学生の子供に

しか見えないんだろうな。

にしても、鷹峰さんのコンパス長過ぎ！彼の一步は、私の三歩くらいある。一体私ってばどれだけコンパス短いんだろう……。

何だか凄い所に連れて来られた気分になってしまった。

どうやら、出国審査も此処でやるようだ。鷹峰さんとお偉いさんが、握手をしながら何かを話している。今のうちに逃げようかと思っただけど、さっき鷹峰さんに言われた言葉を思い出した。

『蓮美様！あなたがお逃げになる度に、一人ずつ命を落とさなければ、お分かりにならないようですね』

あの台詞を言っていた時の鷹峰さんのあの目は、目からビームが出て来そうなくらいに、睨んでいた。ここは、大人しく従っている方が、良いのか……？それとも隙を見て、何処かで逃げ出せば良いのかも……。思わずキョロキョロと辺りを見回していた私。そんな私を見て、パチンと指を鳴らす鷹峰さん。彼の合図で、私の周りには、6人のSPが付きまといて来た。

仕方無く大人しくしている私は、先程から鷹峰さんと空港職員らしき人の会話をかじって聞いていた。

会話が日本語ではなく英語なので、あまりの早口で耳が付いて行けずに蓮美は、ただ黙って鷹峰さんの隣に立っていただけだった。

それが終わると今度は、別の部屋へ繋がる通路に案内された。

其処には空港の関係者やお偉いさん達が、私と鷹峰さんの前にずらっと並んで立っているのだ。そこを歩いて行くんだけど、私は申し訳なくてつい下を向いてしまう。そんな時に足が上手く動かせなくて（つまり短い足なのに、からまつたんです）転けそうになった私の身体を支えてくれた鷹峰さんは、クスツと笑うと私を横抱きしてジェットの中まで歩いてくれた。

抱き上げられた時に思わず声が出ってしまった。

「うわわ！ 見えちゃうよ！！」

情けない程、色気ない声だった。

すぐ鷹峰さんのすぐ側に付いていたSPの人が気を使って、ブランケットを私の膝にかけてくれた。

「あ、ありがとうございます．．．」

初めての海外旅行が、私のクソ親父の尻拭いだなんて胸くそ悪い。

蓮美は機内に入っても、まだ鷹峰さんに抱っこされたままだった。

これを羞恥プレイと言わずになんと言うんだろう．．．。

蓮美の顔が真っ赤に染まる。ゆったりとした革張りのリクライニングシートの下ろしてもらった。

凄いくらいフカフカだ。それにこの皮の臭いが、何とも言えないし、それにこの手触り、少しひんやりするくらいで丁度良いつて感じ。

これまで気が張っていたんだろうな、私は吸い込まれる様に眠ってしまった。何度か誰かに揺り起こされていたようだけど、初めてと言っても過言じゃない程、フカフカのシートの上でぐっすり12時間眠っていた。

「蓮美様」

「う．．．ん。誰？ 後少し寝かせて．．．」

鷹峰さんの声で漸く目が覚めた。

どんな声って．．．「君のお父さんの事だけど．．．」と言っ
一言だったのだ。

私の言葉に、含み笑いをしながらも丁寧に返事をしてくれる鷹峰さ
ん。

はい．．．。私、反省してます。あなたとSPの人達を日本の空
港で隠れんぼしちゃいました。でも鷹峰さんの素晴らしい頭脳をフ
ル活用して、私は掴まっちゃったけどね。そんな事を思いながらも
そう言えばさつきクソ親父の事を言っていたわよね？ 確かにそう
聞こえたわ！

寝ぼけ眼で私は、ガバツと起きると呆気にとられている鷹峰さんを
見てきいたのよね。

「あのクソ親父は、何処？！ 娘に借金を押し付けて自分はこの
うと暮らしているなんて。許せない！」

「蓮美様。あなたのお父さんは、こちらで確保しましたので、ご安
心ください。それではそろそろ下りましょう」

「へ？もしかして、もうイギリスに着いちゃったりしてますか？」

「はい。10分前に到着しました。蓮美様があまりにもぐっすりとなむっていらつしゃったのですから、少し待たせてもらいました」

蓮美は頭を抱えてシートに突っ伏していた。

（ああー。私の憧れのフライトアテンダントのお姉さんも見れなかったし、それに、夢の機内食も食べられなかった・・・）

がつくりと肩を落としている蓮美に鷹峰は、クスクス笑いながらも「そろそろ蓮美様のお腹もすいて来た事でしょうし、何処かで少し早いお昼でも頂きましょう」
その言葉に蓮美の顔は太陽の様に輝いていた。

（なんて分かりやすい子なんだろう。だからこそ、あのお方に気に入られたのだろう。ですが、また逃げられるかもしれない・・・）

笑顔の蓮美は、食事と聞いて尻尾でも生えていたら、ちぎれんばかりに振っていただろう。そのくらいお腹が減っていた。

入国審査もすぐに終わり、出口には、黒服の人達がワンサカ居た。皆さん片方の耳にイヤホンを着けています。これって、もしかして皆さんゴットファーザーを迎えに来たマフィアの人なのかしら・・・。

だとしたら誰を待っているんだろう？ 何だか嫌な予感がするのは私だけなのかしら・・・お願い！違うと言って違うと・・・
蓮美の願いも空しく、黒服の人達は、蓮美と鷹峰さんに近づくと深々とお辞儀をしてきた。

「驚一様、蓮美様お迎えに上がりました」

「ご苦労だった」

あゝ！！あのクソ親父とうとうゴッドファーザーにまで、お金を借りやがったのか！！

あゝアタシの普通の生活が！！遠のいて行く…。蓮美は顔を引き攣らせながらも、いつもの営業スマイルを見せている。

心の中では、大声で騒いで泣いていた。そんな事もつゆ知らず周りの黒服の人達は、2人を護る様に花道を作ってくれた。

(ひえゝ止めて下さい！！なんで、こんな目立つような事をするのよ！これも全て、あのクソ親父のせいよ！)

空港の出口に停まっていたこれまた黒いベンツに乗せられた蓮美。もちろん彼女の心境は、生きた心地がせず、「私は貝く私は貝く」とブツブツ呪文を唱えていた。

運転手は、そんな蓮美を見て怪訝そうな顔をしていたが、鷹峰さんが「彼女は妄想しているだけだから、気にするな」そう言って車を出させた。

「妄想って．．．それってちょっとヒドイ」

蓮美が唇を尖らせて言うと、鷹峰さんは笑っていた。

この人って、笑い上戸なのかしら。さつきから笑ってばかりだわ。蓮美は溜息をつくと窓の外に流れる景色を見ていた。どんなに綺麗な景色にも蓮美の心は晴れる事など無かった。ただ蓮美の心を占めているのは、一体全体 あのクソ親父ってば今度は何をしたら言うのかしら?! 今度と言う今度は、手足を縛ってでも日本に強制送還させて死ぬまで自分の借金をきっちり自分で返させてやるんだから!

グツと拳を握りしめていた蓮美は、痛い視線を横にいる鷹峰から感じていた。

「蓮美様、そろそろ目的地に着きますよ」

車が停まると後部座席のドアが開けられた。先に下りた鷹峰さんがまだ車の後部座席にいた蓮美に手を差し出して来た。

「お手をどうぞ」

そう鷹峰さんに言われて蓮美は少しムツとしていた。

「私、犬じゃないです！　もしかして、お手の次はお代わりですか？　それに子供でもないし、一人で降りれます！」

そう言うと鷹峰さんは驚いた顔をしていたが、笑っていた。一人で車から下りたは良かったが、目の前に広がる豪邸と言うべきなのか城？とも言える建物を見て、蓮美は足を竦ませた。

先にさつさと建物に向って歩き出す鷹峰に、蓮美は早歩きで付いて行く。「ふふふ。まるで、アヒルの親子のようだな」まさかそんな蓮美と鷹峰の様子を建物のある部屋から見ているなんて思いもしなかった。

「こちらのお部屋でお待ち下さい」

この屋敷の執事と呼ばれる人から、家の中を案内されて漸く着いた大きな部屋には、リビングソファとコーヒーテーブルがぽつんと置いてある。

この部屋が広過ぎるせいで、この豪華な革張りのソファが小さく見えるのか……。何だか高校の体育館にあるデスクみたいだ。蓮美の頭の中では今年の四月にこの高校に入学した時、体育館のステージにあった無駄に大きな机を思い出していた。

蓮美は、ソファに座らずただ、窓の外を見ていた。今の蓮美の頭の中には借金の事しか無かった。

どれくらい待たされたのだろうか、イライラして来る自分に落ち着け落ち着けと何度も呪文の様に口にする蓮美。そんな蓮美の様子を別の部屋のモニターから見ている人物がいた。

「ー様、彼女に間違いないでしょうか？」

先程、蓮見達を広間に案内した執事の声だった。執事は、暗闇の中で煌煌と光るモニターを笑顔で見ている自分の主人に尋ねた。時折垣間見える紫の双眸は、この家の直系にしか受け継がれない稀な色。それを見定めた男は、持っていた杖の柄を握りしめた。杖には櫛の木を使っている。柄の部分は、この家の紋章でもある双頭の鷲の頭の部分だけ銀で作られている。鷲の目には、濃い紫水晶が嵌められていた。

「ああ。彼女だよ。真直ぐな瞳に紫色の光が宿る……。責任感が強

くて、情に厚い。一番分かりやすいのは、そうだな、ブルームーンになればお前にもはつきりと分かるだろう。彼女が私のたった一人の後継者であると言う事を」

この屋敷の主人の顔が暗闇で良く見えないが、左手に光る大きなルビーの指輪が見える。モニターの光に反射された光がルビーに当たると、壁に赤い文様が浮かび上がった。

（真澄に生き写しだ。人を愛し慈しみそして、慈愛に満ちる聖女―まるで……自分の命を顧みずに、この老いぼれを救ってくれたのはね）

老人の頬に光る一筋の涙を見た執事は、自分の胸ポケットからハンカチを出すと、自分のご主人様である老人に渡した。

ご主人様と呼ばれた老人は、眉間に深い皺を寄せるともう一つのモニターを憎らしげに見ていた。其処に移っているのは、蓮美の父親と名乗っている男だった。東雲正雄……ヤツの名を聞く度に、胸くそが悪くなる。モニター越しに目で睨み殺すかのごとく、物凄い形相で正雄が写されているモニターを見ている。

16年前の夏だ。自分の愛娘真澄が突然嫁ぎ先のアッシェンバツ八侯爵で幸せに暮らしていた真澄。その真澄が妊娠し、アッシェンバツ八家もそしてこの老人も心から孫が出来たのを喜んでいた。だが、真澄が産月に入る直前にフォックスと呼ばれる賊から攫われたと聞いた時は、驚くよりも心臓を銛で突かれるくらいに辛かった。イギリス中を探しまわったが、奴らはヨーロッパを拠点に転々と住処を移動していたようで、中々奴らの尻尾が掴めなかった。

漸く真澄を攫った組織を捕まえた時には、真澄はアジア行きのコテナに押し込めたと行って笑っていた奴らの脳天に風穴をブチ開けたいほど、怒りに震えた。しかし、そんな真澄を救ってくれたのはあのどうしようもない男と呼ばれる「東雲 正雄」だった。彼が、マドリードのマフィアの屋敷で捕えられていた真澄に一目惚れして、

マフィアの跡取り息子が真澄を連れて日本へと移った事で、真澄の居場所何処か、消息さえも分からなくなってしまうのだ。

あのドラ息子には、元々金遣いが荒かったから、その手の筋で見つければ早いだろうと鷹を括っていた。だが、まさか真澄が度々問題を起こし、あの碌でなしの借金を全て払っていたとは思ひもしなかった。それから、真澄が亡くなったと言う事を知った時は、腑が煮えくり返る程、あの男を憎んだ。そして、あの男が、真澄の娘である蓮美を担保にして、お金を借りたと言う事を聞いた時には、我を忘れて日本にいた。偶然に危ない所を助けられたのだが、プラットホームの下に連れ込まれた時に見えたあの紫の双眸を見た時に、思わず歓喜の声を上げそうになった。

その時、大きな観音開きの扉が開くと執事が軽食を乗せたカートを押し入って来た。

「お待ち致しました。お食事でございます。量は少ないと思われるかもしれませんが、午後三時にまたティータイムがありますので、その時も軽食を食べて頂きます。他に何かございましたら、お呼び下さい」

カートの上に乗っているのは、クラブサンドウィッチとサラダにフルーツの盛り合わせだった。蓮美は、皆の出方を待つ為にじっと待っていた。蓮美の頭の中では2人の蓮美が言い争いをしていた。

蓮美A「蓮美！早く食べなさいよ！あんた全然食べてないのよ！このままじゃ死んじやうわよ！ほら、あの執事さんだつて早く食べるつて言っているじゃないの！」

蓮美B「蓮美！気を付けなさい！もしかすると、そのクラブサンドウィッチにも料金が加算されるかも知れないのよ！ほら、聞こえるでしょ？ 借金の額が増えて行くのが・・・」

チャリン！チャリン？とお金に加算されて行く音が蓮美の頭の中に響いて来る。

蓮美さま？何処か、具合でも悪いのですか？」

「い、いえ…ただ…鷹峰さん。まさかとは思いますが、この美味しそうな食べ物も、えっと…その…借金に含まれているんですか？」

「は？」

イケメン鷹峰さんの少し紫がかった瞳が大きく見開かれている。イケメンもこんな顔するんだ。これって鳩に豆鉄砲って感じだわ。そんな顔してもイケメンに見えるのは、反則よね。ウン！反則よ！クスツと小さく笑う声が聞こえました。思わず、鷹峰さんの方を見ると肩を上下に揺らしながら笑っていました。彼の微笑を見て、私はズギューンと胸を射られちゃいました。

「それは、蓮美様。君が食べる分ですよ。さっき、飛行機の中で言っただでしょ？ それですよ。ですから、安心して食べて下さい」

は！！ そう言えば、そんな事を言っていたな……。ーー「そろそろ蓮美様のお腹もすいて来た事でしょうし、何処かで少し早いお昼でも頂きましょう」って…。

ほっとした蓮美は、目の前のクラブサンドウィッチをしつかり両手で持つと、今生の別れでもするように食べ物を少し上に掲げると瞳を伏せた。

「こんなに美味そうな食べ物、この世にあつたなんて…。感激です！ どうか、私に食われちゃって下さい！」

蓮美はそう言うと、はむっとクラブサンドウィッチに食いついた。蓮美は、咀嚼をしながら全身でこの食事のおいしさに酔っていた。

そんな大げさ過ぎるほど感激している蓮美を鷹峰は目を細めてみていた。

「御ごちそうさまでした！ 本当に天国に行ったかっと思う程の食事を味わいながら美味しく頂きました！ありがとうございます！」

「て、天国にですか？ はあ…まあ蓮美様が感激して頂ければ、それはそれで良いでしょう」

鷹峰は、天井に設置されている何台かの防犯カメラの内の一つを見ると、頷いた。

それを合図に先程執事が出て来た観音開きのフレンチドアが開けられた。2人の黒服の男達に腕を拘束された人物を蓮美の目の前に連れて来た。

口には、騒がない様に猿ぐつわをしてある。痩せ細ったのか、妙に瘦けた頬が痛々しいが、蓮美は何も言わずにただじっとその目の前に連れて来られた男を見ていた。

「鷹峰さん、これは何の真似ですか？」

「いえ、ただの余興ですよ。蓮美様は、ご満足頂けましたか？」

蓮美の前に連れて来られた男の両目から、涙が出て来ている。蓮美は、顔に感情を顔に出さずに、ただじつと男の顔を見ていた。その男は自分の父親にそっくりであった。だが、蓮美だって馬鹿じゃない。此処まで痛めつけられた男が自分の父親だと言って連れて来られて、ほいほいと信じる程、情にもろくは無い。

「この男がどうしたのですか？ 鷹峰さんは、何をお考えなのですか？」

フツツと口元に笑みを讃えた鷹峰は、この男の特徴である胸の切り傷を見せる為に、男の上着を持っていたナイフで切り裂いた。

シュツ！シュツ！シュツ！と布を切り裂く音が空気を震わせる。

蓮美の目の前の男には、蓮美がクソ親父と呼ぶ男が持っている胸の傷と同じのが、そこにあつた。

それを見ても、蓮美の表情は何も変わらない。

「私に何を言わせたいのですか？ この様な男は知りませんが、一体何を根拠にこんな事をされるのですか？」

「いえね…。この男が蓮美様、あなた様の父親だと言って私のご主人様を揺するうとしたものですから、捕えたままでです。あなた様のお父上ではないのであれば、この者は海の藻くずとなって頂くかありませんね」

「……………」

蓮美は、じつと考えていた。目の前にいる男は、恐らく100%の確率で自分のクソ親父なのだろう。だが、これ以上借金を娘に押し付ける親を庇う程、自分は清廉潔白ではないし、お人好しでもない。でも、これはやりすぎだ。

「蓮美様。ご決断を」

「……………鷹峰さん。私は、脅しには屈しません。その男が私の父親だと言う証拠が何処にあるのですか？ DNA調査でもされたのですか？ 現にその男は声を潰されているではないですか。私はそのような者が言う世迷い言など、信じたくもありません」

無表情で蓮美は言う、目の前の男達の間を見据えていた。何事にも動揺することなく、凜々しい顔で父親の顔に目をやる。

父正雄は、がっくりと項垂れていた。恐らくこの男は、娘は自分の事を許してくれるとも思っていたのだろう。だから、連れて来られた時も目には余裕の表情が見られた。猿ぐつわを外された男は、蓮美の顔を見ると暴言を吐いて来た。

「こ、この薄情者！お、オメーを此処まで育てて来たのは、誰だっと思ってんだよ！ちーっとは、テメーの父親に感謝しろってんだ！」

「蓮美様？これでも、バラさなくてもよろしいのでしょうか？」

ちらりと蓮美の方を見た鷹峰の立ち振る舞いは、洗練された騎士か、王子の様に無駄な動きはなく、ただ立っているだけで気品と威厳に満ちていた。この男は、自分を試しているのだと、そう蓮美は確信

した。

「別に、この男の言葉は信用なりません。一度地獄でも見た方が良
いのでしょっね」

「こ、この薄情者！お、オメーを此処まで育てて来たのは、誰だっ
て思ってたんだよ！ちーっとは、テメーの父親に感謝しろってんだ！」

「蓮美様？それでも、バラさなくてもよろしいのでしょうか？」

ちらりと蓮美の方を見た鷹峰の立ち振る舞いは、洗練された騎士か、
王子の様に無駄な動きはなく、ただ立っているだけで気品と威厳に
満ちていた。この男は、自分を試しているのだと、そう蓮美は確信
した。

「別に、この男の言葉は信用なりません。一度地獄でも見た方が良
いでしょうね」

蓮美の父親正雄は、自分の娘の冷たい言葉に耳を疑った。自分が
掴まったのを見れば許してくれる者だと思っていた正雄は、ビクッ
と身体を強ばらせると自分の両腕を掴んでいた黒服の男達を見て、
そして蓮美を見た。

「は…蓮美…」

蓮美は、ただ氷のような表情で自分を見ていた。其処には、いつ
も無邪気で笑ったり泣いたり怒ったりするような感情など何も無か
った。

正雄は、漸く自分が娘に仕出かした過ちに気がついたのだった。妻
に甘えてばかりで、そして最愛の妻を亡くした悲しみや辛さを全て
娼婦達や博打に注ぎ込んだ自分の情けなさ。その度に借金、雪だ
るま方式に膨れ上がって行った。もう金融会社から鏝一文も借りれ

ない事が分かると、娘にそれを背負わせれば良いと思った正雄は、娘が16になるあの日まで待つ事にしたのだった。

娘に判を作らせ、その判を使って借用証明書に全ての自分の借金を娘に背負わせると言う名目で、ある老人から金を借りたのだ。老人は、ある少女を捜していると言っていたから、父親は直ぐさま自分の娘を差し出した。だが、娘は働き者で少しずつでも金額をキチンと返している。その事を知った正雄は一度蓮美に会おうと思って、家に帰ると鷹峰に掴まってしまったのだ。それ以来、イギリスに強制的に連れて来られた上に、肉体労働をさせられていた。

鷹峰から「もし、あなたの娘が父親であるあなたがやった全ての事を許すと言うのなら、その時あなたは自由になれます。ですが、それまでの間あなたは此処で借金返済の為に働いて頂きます」そう言われたのだ。

正雄は、確信していた。

どんなにぐーたらな自分でも、蓮美は許してくれると。だが、現実とは違ったのだ。

「承知致しました。では、そのようにさせましょう」

鷹峰の手には、どこから渡されたのか猛獣を調教する時に使う鞭が握られていた。ヒュン！ピシ！バシ！と男の身体に向って鞭が撓る。蓮美は、それをじつと見ていた。目を反らす事無く、自分の父親の身体に何度も打たれる鞭。正雄が着ていた衣服も鞭が彼の背中に当たる度に、布が引き裂かれ千切れると次々に血が滲んで真っ赤に腫れ上がったミミズ腫れが浮き出て来る。蓮美は、目を反らす事無くそれをただ黙って見ていた。この男に反省と言う言葉が出るのかでないのか、それを待つだけだった。

「は、蓮美……許してくれ……悪かった。この通りだ……」

やがて男の口から、自分への償いの言葉が紡ぎ出された。それを聞いた蓮美は鷹峰が振り上げる鞭の前に立ちふさがって、父親の身体に縋り付いた。鷹峰が振り下ろした鞭は、撓って空気を震わせると勢い良く、蓮美の背中に当たった。蓮美は、痛みに耐えていた。突然の蓮美の行動に驚いた鷹峰は、鞭を投げ捨てると蓮美に駆け寄った。

「は、蓮美様！ どうしてこのような者を庇うのですか！」

「……鷹峰さん……私は争いごとや血は好みません。ですが、この様な男を許すような寛容な心など、私にはありません。ただ！……ただ、その男が本当に私の父親であれば、私に対しての罪償いとして、此処で死ぬまで働かせてやって下さい。それだけです」

「は、蓮美…。父さんを、ゆ、許してはくれないのか?!」

「あんたの三文猿芝居には、飽きたわ。そんな事を言つて、またあたしを騙すんでしょ!」

「ち、違つ! し、信じてくれ! 蓮美!」

「あんたの尻拭いばかり、コツチはさせられていい迷惑なのよ!」

「蓮美!俺はそんな薄情な娘に…育てたのよ」

「蓮美!」

父親の悲痛な叫びが部屋の中で木霊する。

鷹峰は、蓮美の父親である東雲正雄の顔を見た。此処に連れて来られる前に幾度か、脱走を繰り返す度に捕えられ、お仕置きとして顔や身体を殴られた。これでも若い頃の父正雄は、下町のプレイボーイと浮き名を流していた。この男も、今ではその面影もない。スツと鼻筋が通つて高かつた鼻は何度もへし折られ、ひん曲がつた鷺鼻になっている。頬は瘦け、ふさふさとしていた頭髮も、今では落ち武者か骸骨に少し毛が残っているように見える。目は、ギラギラとしているが、鷹峰達を見る度に右へ左へと泳いでいる。

(蒔いた種は自分で刈らせるつて言う事か…。全くこのお嬢さんは、本当に他人の為にどうして此処まで身体を張るかね…。まあ、そんな方だからこそ、あのお方のお気に入りなのだろう)

鷹峰は、気を失いそうになりながらも、借り染めの父である正雄を庇って鞭を自分の背中に受けた蓮美を見下ろしていた。

蓮美は必死になって、クソ親父と呼んでいた男の身体に縋り着くと、振り下ろさせる鞭の雨から父親を護った。鷹峰からどうして庇うのかと聞かれても、蓮美には、答えなど分からない。自分とは血のつながりなど無い事は、高校に入学する際に取り寄せた戸籍謄本で分かっていた。

「蓮美様……」

正雄を庇っていた蓮美の身体が、ぐらりと揺れると床に崩れ落ちてく。背中に鞭を受け激痛が走っているのだろう、額には脂汗を掻きながらも必死になって言葉を紡いでいる蓮美を見て、鷹峰はすぐさま鞭を後に投げ捨てる。蓮美を抱き上げて別の部屋へと運んで行った。

何故、彼女は此処までやるのだ？ 自分と最愛の母親を借金地獄にまで追い詰めたあのグータラなあを男を庇うのだ！ 血の繋がっていないあの男をどうして！

16年前にあのお方のお嬢様が、何者かに酔って攫われてしまった。

警察にも通報したが、半月経つてもお嬢様を連れ去った者達の足取りは掴めなかった。警察ではお嬢様を行方不明者扱いにして、事を穏便に済まそうとしていた。最愛の娘を攫われて哀しみに浸っておられたあのお方は、私に自分の孫を見つける事が出来れば……
そして、その孫が女であればお前との婚姻をさせようと言って下さった。

気がついたら、ぼんやりと白い天井が見える。蓮美は、起き抜けの回らない脳で必死に考えていた（此処は一体何処なんだろう。早く起きなくっちゃ！）そう思って、身体を起こそうとすると背中に激痛が走った。

気がついたら、ぼんやりと白い天井が見える。蓮美は、起き抜けの回らない脳で必死に考えていた（此処は一体何処なんだろう。早く起きなくっちゃ！）そう思って、身体を起こそうとすると背中に激痛が走った。

「ッ痛！」

息が上がリ、肩を上下にしなから自分で落ち着こうと必死になって、シーツを握りしめる両手。

ベッドのサイドに置いてあるランプスタンドには、手桶と布があった。その布は所々赤黒く染まっているのが分かる。多分、ワタシの血だろう。蓮美は、眉を顰めながら自分の手を握っている他人の手を見つめた。起き抜けは、いつも視力が定まらない蓮美は、視界がクリアになるまで大体30分はかかる。ベッドの端には金の毛並みをした猫が眠っているようだ。そつと金髪の塊に手を伸ばして触ってみると本当に猫の様に毛が柔らかい。猫だと思って触っていたら、それが人間だと気付き蓮美は驚いていた。しかも、その人間が鷹峰さんだと分かった時は、心臓が大きく鼓動するのが、全身で痛いほど聞こえた。

ずるい……。思わず出してしまった言葉。

目を瞑っただけでも、ここまで綺麗な顔の人なんて見た事ない。そつと彼の金の髪を撫でた。サラサラのストレートヘアは、まるで洋画に出て来る王子様だ。前に嵌ってみていた映画のヒーローみたいだ。この人の瞳ってどうして少し紫がかっているんだろうか？そんな事を思いながら、首筋にある模様を見て驚いた。どう見てもこれは、吸血鬼に吸われた痕にしかみえない。そう考えると、鷹峰さんが私のポロアパートに来たのは、夜だった。日本から出る飛行機もやはり夜の便だった。そして、イギリスに着いたのは昼過ぎだったけど、

彼っつては分厚いサングラスをかけて、御付きの人から大きな日傘をさしてもらっていた。思わずアンタ何様？って突っ込みそうになっただけ。

「バンパイアだったんだ…？」

道理で肌が青白くて目が紫水晶のように綺麗だと思ったんだよね。
。クスツと笑いながら、彼の前髪を何度も撫でていた。

撫でていた手をいきなり強い力で握られた私は、顔色を真っ青にさせながらバンパイアだと分かった鷹峰さんの顔を見ていた。

そう思えば、このお屋敷の周りには、薔薇がない。バンパイアは、薔薇を触ると枯れさせると言う逸話があるのだが、本当なのだろうか？

そつと金の髪を撫でている私の手を掴んだのは、いつの間にか目を覚ましていた鷹峰さん本人だった。

「蓮美様。気がつかれていたんですね。お怪我は大丈夫ですか？」

ん？ 今、お怪我は大丈夫ですか？って聞いて来たけど、私にその怪我をさせたのは、鷹峰さんあなたなんですけど。お前が聞くなお前が！！ って思わず突っ込みたくなったけど、よく考えてみればさ、全ての元凶は私の無責任親父のせいだったんだ。血は繋がっていないけどね。ここは、特に重要だわ！

彼奴が、早く自分の無責任さを認めていればこんな事にはならなかったし、私もアイツを庇う事なんてするつもりも無かったのに。昔から、何故か知らないが私の怪我はすぐに治りやすく、肉を抉るような怪我でも3日もあれば、かさぶたが黒くなるほどまで回復している。

「あ、あのお、鷹峰さんって、バンパイアなんですか？」

私の質問にきよとんとしたような顔をして来た鷹峰さんは、プツと吹き出すと笑い始めた。この人ってば、一度笑い出すと停まらないから、私はその間ずっと待っている事になる。漸く止まった笑いに、私は深く溜息をついた。

人の事ムチ叩いたのに、。、。、。何をわらって居るのかしら？多分私が聞いた事は、やっぱり突拍子も無いような事だったんわ。

「バンパイアですか…。違いますよ。これは、アザですから」

鷹峰さんが、ネクタイを緩めてワイシャツのボタンを少し外し始めたから、私は思いつきり真っ赤な顔をして俯いてしまった。

た、確かにアザでした。しかも、Yって言う文字に見えるのは何ででしょうね？

「他にもアザがあるか、蓮美様にチェックして頂いてもよろしいのですが…。」

いきなり、ワイシャツを脱ぎ出して来た時には、思わず鷹峰さの手を掴んで、脱ぐのを止めさせたけど。今落ち着いて考えれば、惜しい事をしたって思ったわ。

「あ、そうですか…あ、それよりも…あ！　そうですよ！　そうそう！　鷹峰さんは私に会わせたい人がいるって言ってましたよね？　何時会えるのですか？」

思い出した様に蓮美がそう言うと、鷹峰は右手の親指と人差し指で自分の顎を掴んで考え込んでいた。あゝ！　そのポーズって、シャローックホームズがよくやっていたポーズだわ。　流星はイギリスだわね。クスツと思わず笑みがこぼれてしまう。

蓮美は、部屋の隅に置かれてあった白い華奢な猫足テーブルの上に、紅茶のセットがあるのを見つけると、ベッドから飛び出す様に出て来た。

「わ〜！　可愛い〜！！　本当にリ　ちゃん人形のセットみたいだわ！！　感激〜！！」

蓮美は、白い猫足のテーブルと椅子に頼ずりをしている。そんな蓮美の様子を鷹峰は、ただ微笑んでいた。

「鷹峰さん、紅茶飲みますか？　私、紅茶って大好きなんですよ〜」

「

明るい春の日だまりのような笑顔で、蓮美が鷹峰に話して来る。途端に鷹峰は、笑顔で頷いて来た。

へえ、この人でも、こんな表情が出来るんだ。いつも、変な引き攣り笑いをしているかと思ったら、氷の様な無表情を取って着けたようだし、だけど、こんな無邪気そうな笑顔も私は好きかも…。そんな蓮美の笑顔に吊られて、鷹峰も笑顔が出て来た。

蓮美は、電子ポットの中にミネラルウォーターを注ぐと、お湯が湧くまで数分待つ事にした。

茶葉を紅茶ポットの中に入れて、お湯とミネラルウォーターを少し入れて、茶葉が開くのを待った。

部屋中に心地よいオレンジローズの香りが、充滿する。蓮美は、この紅茶の香りが大好きだ。幼くして死別した母親を思い出させる香り。いつも、母さんは、紅茶を美味しく作って自分に飲ませてくれた。数少ない母さんと蓮美の思い出の香りである。

「上手いな」

「ありがとう。かあさんから、習ったのよ」

褒められて、蓮美は思わず俯きはにかんでいた。

私達の間にはんわかとした雰囲気が出て来た所で、誰かがドアをノックする音が聞こえた。

「はい。」

「驚一。私だ、入っても良いかね？」

「鷺一。私だ。入っても良いかね？」

鷺一？って誰よ。そんな事を考えていたら、鷹峰さんが、自分の胸に手を当てていた。あー と言えば鷹峰さんって、確か鷺一って名前だったわね。忘れてました。もしかして、私の考えは全てタダ漏れですかね？ それともあなたがエスパーですかね？ 思わず首を傾げて鷹峰さんを見つめるとニツコリ微笑まれて「はい。そうですね。蓮美様は、喜怒哀楽が分かりやすいお方なので、良く分かりますよ。それに、私はエスパーではございません」
小声で言われるとどーも何とも恥ずかしいです。

「ええ。どうぞ蓮美様もお目を覚ましになられましたので、丁度宜しいかと思われませう」

「うむ」

大きな扉が開くと外から光が漏れて来る。一瞬、眩い光で視界が奪われると一体何が起こったのか分からなかった。杖を突いている音が聞こえて来る。ゆっくりと私が居るベッドの側の椅子に座ったその人は、私の事をじっと見ているようだ。目の眩みが取れた頃になつて、漸く自分の目の前に居る人が誰なのかを知った。

「あなたはー！」

「ええ。そうですよ。名乗っていませんでしたね。私はヘンリーミハイル フォングガルグと言う老人じゃよ。蓮美さん、その節は私の命を助けて頂き有り難うございます」

老人は、微笑むと蓮美の手を握って来た。蓮美を見つめる老人の瞳は涙に濡れている。蓮美は、怪訝そうな顔をしていたが、彼の頬に伝って流れる涙を指で拭いてやった。

「真澄……あなたのお母さんは、どんな人だったのかね？ 教えて欲しいのだが」

「え？母さんをご存知なんですか？」

どうして、このおじいさんは私の母さんの名前を知っているの？杖の柄に両手を重ねる様にして奥とその上に顎を乗せて、遠くを見る目をしているおじいさんは、ポツリポツリと私に話始めた。それは、私が知らない母親のことだった。

「ああ。真澄は、私の大切な一人娘だったからね。あなたのその紫色の双眸は、我が愛娘の真澄と同じだ。こっちにきてごらん、写真を見せてあげましょう」

「……！」

私の祖父だと名乗る老人が、お母さんの若い頃の写真を見せてくれた。それは、丁度私と同じ16才の頃の写真だ。流れるような黒髪に象牙のような肌、そして私と同じアーモンド形の目には紫色に光っている。こんなに似ていたんだ……。そして、結婚式の写真も見せてもらった。クラシック調のマーメイドドレスには、母さんが大好きな蝶が至る所にレースで編み込まれていた。母さんって、こんなに無邪気に笑っていたのね……。

思わず涙が頬を伝った。写真の中に新聞記事が紛れ込んでいた。

ハラリと落ちて来た新聞記事は、私の頭の奥にある警告ランプをならし続けている。

知らなきゃならぬんだろつけど、私の本能がダメだと拒否反応を示している。レッドランプ点灯しっぱなしだよ。

だって、その新聞記事を見た鷹峰さんも、ヘンリーさんも顔が真っ青なんだもん。

恐る恐る私は、床に落ちた新聞記事を拾うとマジマジと見てみた。英語ではなくて、フランス語の新聞記事だった。フランス語を習っていない蓮美は老人と鷹峰の顔を困ったような顔で見つめる。

「……………」

鷹峰は、フオングガルグ候を見ると頷いていた。そして、記事を和訳して蓮美に判りやすく読んでくれた。

アツシエンバツ八家は、ジャックとジャン・ジョルジュと言う兄弟がいたが、真澄はジャン・ジョルジュと恋に落ち結ばれ結婚した。ジャックは、真澄を諦め切れずに、狂った様に弟のジャン・ジョルジュを散弾銃で射殺し、止めに入った執事や、メイド達までもジャックの凶器の餌食となった。ジャックは、真澄を連れ去り、愛を告白するが真澄は頑に拒んだ。怒り狂ったジャックは、真澄をボルノ一家と言うマフィアに渡した後で、アツシエンバツ八邸に火を放ち自らもそこで命を落とした。その時のボルノ一家で6代目を継承していたのが、あの正雄だったのだ。

「母さんは、苦労してましたが、私と2人で貧しくも楽しく過ごして来ました」

「2人で？ あの男は側にいなかったのか？」

「ええ。母さんは、何も言いませんでしたが、ダメ親父は、かあさんに指一本触れた事はないんです。たまに親父が酒に酔った時に教えてくれました。『真澄は、大切な方から預かったお嬢様だから、俺が汚ねー手で汚しちゃいけないんだよ』って言ってました」

「そうか…」

「あ、あのおく。あなたは一体何者ですか？ 母さんのつてまさか、あなたが私の祖父って事ですか？」

「ええ。そうです。あなたは我がフォングガルグ家の正統なる血筋を持つ者で、私の孫ですよ。そして、あなたの本当の父親はある事件で皆殺しになってしまったアツシエンバツ八侯爵です」

「本当の父親… 皆殺し？」

蓮美の顔色は青ざめた。両手で口を覆い隠し、何とか嗚咽を出さない様に何度も唾を呑み込んだ。

真つ青な顔で立って居られなくなった蓮美は、額に手を当てると、ふらついて床に倒れそうになった。そんな蓮美を鷹峰が腕一本で、支える。もし、これが恋愛映画やドラマならば、此処から愛や恋が生まれるのだろう。

蓮美は思わず、綺麗な顔の鷹峰さんを今生の別れの様に、ジッと見つめていた。

端から見れば、2人で仲よく睨めっこをして居る様だに見えるのだが、この時の蓮美は、あまりの恥ずかしさで、目を逸らした。

今のこの私のこの体制って、映画の「風と共に去りぬ」のポスターと同じ様な感じだわ・・・って、事は、私は やはりこのロリコンイケメンの鷹峰さんに、手箒めにされるんだわ!!!

物凄い目で蓮美が、鷹峰を睨むと、潤んだ蓮美の瞳が紫色に光った。それを見た鷹峰は、驚くと蓮美の顎を掴み自分へと引きよせた。フオングガルグ家の直系にだけに継承される瞳の色。それは、暗闇野中で光る紫水晶色の瞳。^{アメジスト}蓮美は数歩後ずさりをすると、右足で鷹峰の身体を蹴り上げ、鷹峰の手を振りほどくと素早くバックフリップをして、鷹峰から離れた。

蓮美の運動神経の良さを見たヘンリーは、眼を細めた。

「ジャンにそっくりだな。血は争ないな。 鷺一。 此処に来るまで、大変だったか？」

「ええ。 空港で2度、私も含めて黒服達の追っ手を全て躲してくれましたよ」

「ほおー。 2度もかね」

「ええ。最初は、店の店員に同情させて、味方にすると、裏口に逃走。その後は、スタツフの服に着替えて……まるで映画並みですよ。トイレでも逃げられましたからね」

「ほおー。それはどんな風にかね？」

面白そうに身を乗り出して聞いて来るヘンリーに、蓮美は驚きを隠せなかった。

（一体、このおじいさんは、何者なの

「蓮美様がトイレに行きたいと言われ、一応女性のSPも付けさせましたが……」

「逃げられたのかい？」

ヘンリーは、面白そうに白いヒゲを人差し指と中指で撫でると、目を細めて笑っていた。

「ええ。まんまと逃げられましたよ。ネズミ花火をトイレで発火させて、みんながパニックになった時を狙って空調口から脱出したんですよ。全く、普通の女子高校生だと思っていたのに、こんなジャジャ馬だとは、先が思いやられますよ」

鷹峰は、空港での騒ぎを思い出すと、苦虫を潰した顔をした。そして一步一步と蓮美に近づくと、今度は蓮美が逃げない様に壁際に追い詰めた。蓮美の額から汗がにじみ出て来る。

（お母さん！ 蓮美は絶対絶命です！ 墓の中から、ゾンビとなって蘇って来て！！！！）

蓮美の心の声が聞こえたのか、鷹峰はフツと微笑むと蓮美を抱き上

げ、元の椅子の上に蓮美を下ろした。

いきなり、今になって本当の父親の事を聞かされ、目出たく父親とのご対面と言う事になるのでは……と少しは、心の中で期待をしていた蓮美だった。

『父親も、使用人皆殺しにされた』と言われ、ハンマーで頭を横殴りにされた感じだ。

確かに、ダメ親父が自分の父親では無い事くらい、蓮美自身知っている。母親が生きていた頃、2人の様子がまるで使用人とお嬢様のようなそんなよそよそしい感じがしていたから、子供心に正雄が父親では無い事くらいピンと来ていた。

だが、本当の父親と言う人は、とうの昔にマフィアによって皆殺しになっていたなんて……。

そんな血生臭い事なんて、映画だけかと思っていた。
ジャン・ジオルジュと言う人は、一体何者だったのかしら？

「ヘンリーさん？」

「はい。何ですか？蓮美さん。出来れば、蓮美さんには、お祖父さまと呼んで欲しいね」

紫色の優しい瞳が、蓮美を見て揺れて居る。

「では、おじいさま。私は、本当の父親であるアッシェンバツ八氏の事は、何も知りません。それにどう言う人だったのか、母からも聞いた事が無いんです。やはり私の父親は、東雲 正雄だけです。娘に自分の借金を背負わせるダメ親父ですが、私が知っている父親は、あの人だけです。私を日本に帰してください」

真つ直ぐにヘンリーの顔を見つめる蓮美の顔は、凜としていた。蓮美の顔は、ヘンリーに生前の真澄を思い出させた。あの時の真澄と同じ目をしておる。

ジャンと結婚したいの！例え、彼が危険と隣り合わせの情報機関の仕事をしていても、私は彼の元へ行きます！

そう言つて、ヘンリーを泣き落とし結婚した真澄。ジャックさえ薬に溺れなかったら、あんな悲劇にはならなかったはずだ。

険しい顔を見るとヘンリーは、自分のペンダントのロケットを開けた。

そこには、愛娘の真澄と真澄が愛したジャンが寄り添う写真だった。そんなヘンリーを見ていた鷹峰は、ヘンリーの代わりに、代弁をした。

「蓮美様。申し訳ありませんが、それは無理でございます」

部屋に響くバリトンの声は、鷹峰さんだった。

落ち込んでいるおじいさまには、悪いけど、親父が自分で借金を返す事になったんだし、私は私の高校生活を思いつきりエンジョイしたいんだから！

「どうして?! 私は、普通の平々凡々な女子高生なの。今まで度重なる苦勞をして来たんだから、私にだって幸せになる権利はあるはずよ！」

「そうですね。ですが、今はまだ蓮美様を日本に帰すわけにはいきません」

「は？ 何言っているの？ 訳分かんない！ 私だって乙女なのよ。恋だつて、これからしたい！ そう思っちゃんいけないの？ 鷹峰さ

んが言っていた条件は果たしたでしょ？ ちゃんとイギリスに来たんだから日本に帰らせてよ！ もう、帰りたいの！」

言いたい事を捲し立てた蓮美は、大きく息を吐いた。

「何故？ どうして？ 帰っちゃいけないのよ！」

「ホテルで狙撃された事を憶えていないんですか？」

その言葉を聞いたヘンリーは、顔を強ばらせると鷹峰さんの方を見ていた。

「どう言う事だ？ 蓮美が狙われているのか？ 相手は？」

「そのようです。恐らくアッシエンバツ八家に恨みを持つ者かと思われます。それがジャック様の生き残りかと・・・」

目の前で交わされている会話は、まるで映画007の中みたいな話だ。

蓮美は、2人が自分を除け者にしてどんどん話を展開して行く事にいら立ちを憶えた。今なら、バッグに入っているパスポートを使えば、家に帰れるかも！ そんな期待をしながらも、白熱する男2人の話を聞いているフリをしながら、蓮美はそつと席をたった。

近くに置いてある自分のバッグを肩にかけて部屋を出ようとした時に、蓮美の腕を捕まえた鷹峰は、黒い微笑みを蓮美に見せた。

「蓮美様。このパスポートでは、日本には帰れませんよ」

「い、いつの間にも！ 人のパスポートを抜き取ったのよ！ 返しなさい泥棒！」

あっさりとしたパスポートを掌に返して来た鷹峰さんに対して、蓮美の危険信号のフラグが立った。

あの切れ者のロリコンイケメンが、素直に返すわけないわ。これは何か罠があるんだわ！きつと！

蓮美の脳に刻まれている危険察知の信号がマックスになっている。

ぱつとパスポートを開いてみると、何も細工はされていないようだ。．．．と思つたら、あれ？ 穴が空いていますよ．．．。

「どう言う事?!」

「蓮美様！ 残念ですが、あなたは、もう既に東雲 蓮美では無いのですよ。ですから、そのパスポートは使えないと言う事です」

それを聞いた蓮美は自分のスレンダーなお腹を触ると、鷹峰を見つめた。

蓮美の頭の中では、二人の蓮美達がプチパニックを起こしていた。

蓮美A 「どう言う事よ！ 東雲蓮美じゃないって！？ も、もしかして、既にホテルで知らない間に、銀縁メガネのイケメンロリコンに襲われていたの?!」

蓮美B 「えー！ それって野獣よ！ やっぱり眼鏡のイケメンロリコンだったんだわ！ お母さん！ 蓮美は、もう お嫁に行けない体になってしまいました!」

「え……って事は私の中に、赤ちゃんが居るんですか?」

蓮美の一言で、その場に居た全員が、固まってしまった。

「蓮美様！ 本当なのですか？ 一体誰に体を許したのですか!」

必死な顔で蓮美の肩を掴んで来た鷹峰。そして、そんな鷹峰と同じ様に、驚きながらも、厳しい目をして蓮美を見ているヘンリー達に、蓮美は震える声で聞いてみた。

「だ、だとしたら、そ、その人は、どうなるのですか?」

声が上擦っている蓮美は、赤面しながら2人に聞いた。もしかして、このお腹の中に赤ちゃんがいる（既に断言している蓮美だった）この子だけでも、守らなきゃ！

「ファミリーに相応しくなければ、死んで償ってもらいます」

「し、死ぬ！？ どうして!？」

思わず椅子から立ち上がった蓮美を取り成す様に、落ち着かせると倒れた椅子を起こして、蓮美をそつと座らせた。

「あなたお一人の体では無いのですから、落ち着いてください。さあ、お腹の子供の父親は誰なんですか？」

綺麗な顔が無表情で、蓮美に近づいて来る。怒っているようだ。これが静かな怒りなのかしら。

（でもどうして、この人はホテルで人の事を押し倒して置いて、そんな恥ずかしい事を私に聞くのかしら？ 怒りたいのは、私の方だわ）蓮美は、蓮美で鷹峰に怒っていた。

これほど、迫力のある物はない。蓮美は、震える指で鷹峰を指差すと、「父親は、あなたです」そう言った。

鷹峰は、呆気に取られて、暫し蓮美の顔を見て居た。鷹峰は、ヘンリーの顔を見ると両手を顔の近くで広げて、身に覚えは無いと言う様に、ヘンリーの方を見た。

ヘンリーは、笑いながら席を立つと「驚一もそんな驚いた顔をする事があるんだな・・・まあ、若い二人で積もる話もあるだろうから、邪魔者は退散するよ」

そう言つと部屋を出て行った。

しんと静まった広い部屋では、真つ赤な顔をした蓮美と額に手を当

てて考え事をしている鷹峰がいる。

「は、蓮美様．．．．。あなたは、どうやって子供が出来るのか、知って居るのですか？」

「も、もちろん。知っていますよ！」

恥ずかしさのあまり声が大きくなった蓮美は、真っ赤になりながらも答えた。

「お姫様抱っこされたり、男の人とベッドで一緒に寝て居ると出来ます。あ、後は身体を重ねると出来るって聞きました」

蓮美は、至って真面目な顔で答えた。

それを聞いた鷹峰は、プハハハと笑い始めると、笑いが止まらなくなつて居た。

蓮美は真面目に言つて居るのにどうして、自分の事を笑うんだろうか？とムツとした顔で、鷹峰の顔を睨んだ。

「だって、鷹峰さんに私は抱っこされて、一緒にて居たでしょ？」

「蓮美様。それは、飛行機の中ででしょうか？ そんな事などで、子供は出来ません！」

蓮美は鷹峰に近付くと、「じゃあ、ホテルで私を床に押し倒した時は？」

「あれは、他のビルから狙撃されて、蓮美様を守ろうとして．．．。とにかく、あんな状態で、子供は出来ません！」

とまあ、鷹峰さんに断言された。

「じゃあ。どうやって出来るんですか!？」　そう聞いて来た。

鷹峰は、くつくくと笑い出す。

涙目になりながらも、お腹を抱えて笑い転げた。

「蓮美様、学校で何を習って来て居たんですか？」

「勉強です」

「保健体育は、習わなかったんですか？」

「その時間は、いつもバイトの時間だったので、学校をフケてましたけど、どうかしたんですか？」

鷹峰は、まさか16歳の高校生に対して、小学生でも知って居る、セックスの事を蓮美にわかる様に教えてやらなければならないのかと、考えると大きく溜息を着いた。

雌しべと雄しべから教えてやらねば行けないな……。

「あのー　鷹峰さん。もしかして、私にも許嫁とか言う婚約者が、居たりするのでしょうか？」

鷹峰は、襟を正すと、蓮美の方を見据えた。

ああー！　なんか、嫌な予感がして来る！　地雷を踏んじやったみたいな、危険信号が頭の中で鳴り響いて居る！

「ええ。いらっしやいますよ」

ああー！やっぱり、誰？そんな物好きで心臓にタワシの毛が生えて居るのは？誰？これって聞いちゃいけないのよね！ダメよね！
頭で赤いランプか点滅中！

蓮美聞いちゃダメよ！

だけど、怖いもの見たさと100%の知りたいたいと言う興味本位で、
聞いてしまった。

「それって、誰ですか？ 私が知って居る人ですか？」

私の頭の中では、2人の蓮美がハモっている。

蓮美A & B 『聞いちゃダメー！絶対ダメー！』

「ええ。あなたがとても良く知っている方ですよ」

そう言っている鷹峰さんは、黒い微笑みで蓮美に一步また、一步と近づいて来た。その度に、蓮美も一步一步と後退している。

ああー！ 神様！ お母さん！ 私は今から、そっちへ旅立ちます！蓮美は窓に近づくと鷹峰の方を見た。

「それは・・・」

私に許嫁がいる？

しかも、私が知っている人と言えば、八百屋の源さんでもないし、もしかして、高校で一緒のクラスだった男子とか？

一体、誰なんだろう？

蓮美の中では、鷹峰と言う名前は出て来なかった。

鷹峰「笑い上戸のイケメンロリコンまたは、保護者と言う設定になってしまっている。」

「蓮美様の許嫁は……。」

鷹峰さんが、何か言おうとした時に、屋敷内で警報機が鳴り響いた。

「ジリリリリリリ！」

一体何事なの？

思わず、きよろきよろと周りを見渡す蓮美は、自分が鷹峰の腕の中で抱き締められている事に気がついた。

「そ、そんな事をすれば、子供が出来てしまう！」

「このような事くらいでは、子供は出来ません！」

ピシヤリと言う鷹峰に対して、蓮美は紫に光る瞳で真直ぐ鷹峰を見つめていた。

紅葉のように頬を染めて、真剣な顔で言ってくる蓮美を見て、鷹峰は蓮美を抱き締めていた腕を少し緩めた。

蓮美が、逃げる様に鷹峰の腕から離れると、窓際に立った。キラリと光る一筋の光と共に――

グワシャーン

いきなり、窓ガラスが砕け散ると目指し帽を被った男達が、数人窓から侵入して来た。

彼らは、蓮美を見つけると、腕づくで連れ去ろうとした。蓮美も男達から逃げる為に拳法で応戦していたが、背中の傷が痛み動きが鈍くなった所を捕えられて連れ去られて行った。男達は、発煙筒に火を点けると、床に転がした。

「蓮美様！」

蓮美を守る為に戦っていた鷹峰は、煙に目をやられ捕まえていた妖しい男の一人を取り逃がしてしまった。ゲホゲホと咳をしながら、口を押さえ、ドアを開けるとヘンリーの自室へと駆けて行った。

「旦那様！すみません。蓮美様が、捕えられてしまいました」

綺麗な顔に切り傷だらけの鷹峰を見たヘンリーは、渋い顔をする溜息をついた。

「蓮美は、まだ何も知らんのだ。恐らく相手は蓮美が奴らの息の根を止めるような物を持っていると言っ情報でも握ったんだろっ。吐かせるしかないか…。顔も見るのも嫌じゃが、可愛い蓮美のためだ。仕方あるまい」

ヘンリーはそう言うと、この屋敷の地下へ向った。

少しカビ臭く鼻にツンと来る匂いがある、この屋敷の地下は、王侯貴族達が国を支配していた時代に使われていた地下牢である。

そこに、蓮美の育ての父親である東雲 正雄を入れている。

正雄は、椅子に縛られていた。両足には鉄状の足枷が着けられ、鎖

が床に打ち付けてある。両手は自由にしているが、もしも逃亡しようものならと言う事で、ICチップが腕に埋め込まれている。指に嵌められた指輪は、この敷地から出た途端に、正雄の心臓を止める程の電流が流れる仕組みとなっている。

生きて無事に此処から、出ようなんて考えない事だと鷹峰から言われていた正雄だった。

正雄は、遂に自分にも運が巡って来たか！と思うと笑いが出て来た。

「何だ？ 珍しいな。アンタ達2人が仲良く雁首並べて、俺の顔なんざ見に来るなんてな。そうか、蓮美が家に帰りたいたいと言っても来たか？ それとも、そのメガネのあんちゃんが、蓮美を嫁にしたいとでも？ ははは」

相変わらず、この男は減らず口が多いようだ。ヘンリーの眉間に深く皺が入ると、彼の杖を持つ手に力が入った。

鷹峰は、手に持っていたスイッチのボタンを押した。軽くだが、死ぬ程ではない、だが確実に正雄の減らず口とその横柄な態度を黙らせる事は出来る。

「うわああああ！」

正雄の全身が痙攣したかのように、電気ショックで椅子ごとガタガタと音を出して震え出した。

「真澄から、何か預かってないか？」

「俺は知らんぜ！」

鷹峰の足下近くに唾を吐き捨てた正雄は、鷹峰の怒りを買い、またも電気ショックを浴びる事になった。

「うわああああ！ 言う言うから！」

二回目の電気ショックで、肩をゼーハーと上下にさせながらも、鷹峰達を睨んでいた。

「言うよ。言やー良いんだろ！ 何しろ、家には入り浸りには出来ねーしよ。預かり者のお嬢さんに指一本触れるなど先代から言われていたしな」

蓮美が、言っていた様に、この男はそう言つと鼻をならした。

「あんたが地下に入れられている俺の所に来るって事は、蓮美が奴らに掴まつたってことだろうよ」

正雄は、にやりと笑つと鷹峰達を見上げた。

俺だって知らねーんだ… お前らにそう易々とブツを見つつけられてたまるものか…

蓮美は、いつだって俺に取っては最強のカードだぜ…

――16年前に遡る。

アッシエンバツ八家で、開発された薬は、リュウマチや髄膜炎などで、変形した骨の形を元に戻す夢のような薬だった。

それに眼を付けたジャックが、他のマフィアに情報を売った。

その薬の化学記号を記したマイクロチップもノートパソコンもなく、机の上の空想にしか過ぎないと言われて来た。

ジャンの死後、ボルノー一家に匿われていた真澄が、狙われ始めた。今回も、その化学記号の事だ。

この薬は、人体用に作られていたが、ある実験で思わぬ結果が出ってしまった。

爆弾で身体の1/3を失った兵士の身体に、この薬を投与して数ヶ月、彼の身体の骨や筋肉組織、神経などが元通りに形成されて行ったのである。

そうしてこれは、ある特殊合金にも同じような結果が得られると言う実験結果が出た。

それに飛びついたのは、死の商人と言われる武器商人達だった。彼らは、世界中の国を相手にビジネスを展開している。

今、その武器商人達は、マフィア達を抱き込み、血眼になって蓮美を探していた。

医療機関だけじゃなく、殺人兵器まで以前と同じ様に修復可能な夢の薬は、アンティーク車を愛するセレブ達にまで、この話が広がった。

今や、蓮美は日本でさえも道を歩けないくらいに、本人が望まずとも危険な世界に入り込んでしまった。

「蓮美様・・・」

最悪の事態だけは、避けたいと思い鷹峰は蓮美をイギリスに連れて来たのだが、蓮美様にこの事をお話するべきだったのかも知れない・・・。

蓮美様、どうかご無事でいて下さい。

「旦那様。蓮美様は、私の命に換えてでもお救いします」

116年前に遡る。

アツシエンバツ八家で、開発された薬は、リュウマチや髄膜炎などで、変形した骨の形を元に戻す夢のような薬だった。

それに眼を付けたジャックが、他のマフィアに情報を売った。

その薬の化学記号を記したマイクロチップもノートパソコンもなく、机の上の空想にしか過ぎないと言われて来た。

ジャンの死後、ボルノー一家に匿われていた真澄が、狙われ始めた。今回も、その化学記号の事だ。

この薬は、人体用に作られていたが、ある実験で思わぬ結果が出てしまった。

爆弾で身体の1/3を失った兵士の身体に、この薬を投与して数ヶ月、彼の身体の骨や筋肉組織、神経などが元通りに形成されて行ったのである。

そうしてこれは、ある特殊合金にも同じような結果が得られると言う実験結果が出た。

それに飛びついたのは、死の商人と言われる武器商人だった。彼らは、世界中の国を相手にビジネスを展開している。

今、その武器商人達は、マフィア達を抱き込み、血眼になって蓮美を探していた。

医療機関だけじゃなく、殺人兵器まで以前と同じ様に修復可能な夢の薬は、アンティーク車を愛するセレブ達にまで、この話が広がった。

今や、蓮美は日本でさえも道を歩けないくらいに、本人が望まずとも危険な世界に入り込んでしまった。

その事を知った鷹峰とヘンリーは、正雄に詰寄った。

「だから、お前は蓮美を売ったのか?!」

「ああ。アイツは金になるからな。それに、俺は真澄が隠した場所を知ってるぜ」

そう言うとけらけらと笑い始めた。

「蓮美様…!!」

鷹峰は、悔しそうにギリリツと唇を噛み締めると、正雄を睨んだ。
この男…蓮美様が、身を呈してまで、守って下さったのに、それを仇で返すとは…。やはり、虫けら同然の男だな…。
携帯を取り出すと蓮美の荷物を調べる様に部下に言うと、ヘンリーを伴って地下を出た。

彼らが地下を出るまでの間、ずっと正雄の高笑いが地下牢に響いていた。

鷹峰は、地下牢を見張っていた部下に、鞭を渡すと顎で『やって来い!』と示した。地下牢には、もう正雄の高笑いの声は響く事は無かった。ただ、鞭が正雄の身体を叩き空中で撓る音、そして苦痛で悲鳴をあげる正雄の声だけだった。

「鷲一。蓮美を、蓮美を頼む。ワシには、あの子しかおらんのだ。この家を継ぐ正統な跡取りは、蓮美だけだ。あの子の力になって支えてくれ」

「わかりました。私の命に換えてでも、お嬢様を取り戻してみせます」

「うむ。頼んだぞ、鷲一」

「はい。旦那様」

鷹峰は、ヘンリーに深々と一礼をすると、その場から走り去って行った。

つくづくあのお嬢さんは、トラブルに巻き込まれやすいと見る。彼女に指一本触れさせてたまるものか！

鷹峰の頭の中では、一時間前に蓮美が自分の赤ちゃんを身ごもっているとは勘違いしていた事を思い出していた。

（あんな情報社会の日本で、まさかこんなに天然危惧種みたいな女がいるとはな……。しかも、その女が世界の力ギを握っているとは……。神様も、罪な事を……。いや、粹な事をしてくれるもんだ）

駆け足で鷹峰が回廊を去って行く。

突き当たりの壁に背を付けると、壁に架かっている初代当主フォングガルグ氏の肖像だった。肖像画を鷹峰が片手で押すと、パネルのようにひっくり返って、反対側にある通路に入って行った。

通路を歩いている間、何メートル毎に指紋や、声帯認証がある。そこを通過すると最後の扉があった。

暗証番号を押し、中へ入ると昼間のような日差しと見紛う程に、煌煌とした明るい照明の下で、忙しく動き回る人間達。

「ボス。サイゴンの方で動きがありました」

「ボス。蓮美様の方にも動きがありました」

「そうか。引き続き様子を見てくれ」

「はい」

鷹峰は、自分の席に着くと蓮美が無事にこのフォングガルグ家に帰って来れる様にと祈った。

其処には、黒ずくめの男達が世界中から、様々な情報を集めている場所だった。

このフォングガルグ家は、第二次世界大戦の時に、ナチスドイツ軍の情報を集めるためにイギリス各所から集められた精鋭部隊がここで働いていたのだった。

「ゴルバ！ 蓮美様に取り付けておいた発信器は、上手く作動しているか、チェックしてくれたか？」

「はい！ファルコン様。先程、確認しました所、異常無しです。居場所も確かめました」

何か負に落ちない。これじゃあ、あまりにも簡単過ぎる。一応、発信器の点滅があつた港の倉庫へ、部下を向わせた。

「ファルコン様！もぬけの殻です！ やられました…う、うわあああ！」

「どうした？フィン！フィン！」

通信機から聞こえるのは、爆発音とその後続くザーと言つ無情な無音だった。

「くそ！やられたか！」

どうやら、敵も俺達が蓮美様に発信器を取り付けていた事に気付いていたようだ。でも、発信器は、一つじゃないんだ。そう呟くと鷹峰は黒い笑みを浮かべた。

その頃、蓮美はと言うと、知らない豪邸のベッドの上に寝かされていた。もちろん、衣服に乱れはない。

「う…うん…?」

眼を覚ますと、天蓋付きの豪華なベッドの上だった。薬品を嗅がせられてまだボオーツとしている頭をゆっくり持ち上げる様に、周りを見渡した蓮美は、ゆっくりと上半身を起こした。

「此処は…?」

畳み4畳分のベッドの中央に自分は寝かされていた。

太いオリンポスの神殿のモチーフみたいな円柱4本に囲まれ、天蓋付きとくれば、ここは何処かのお屋敷としか考えられない。

そう思うと、蓮美の頭の中に浮かんだのは、あのバカ親父の顔だった。

「ま、まさかあいつ…私を他のマフィアに売ったとか言うんじゃないでしょうね…」

そう考えるだけで、握りこぶしを作った蓮美だった。

カチャリ ガチャガチャとカギを開ける音がすると3メートルはあろうかと思うような、大きな扉が開いた。

「やあ、お目覚めかい? 蓮美ちゃん」

「圭一先輩？ 一体、何の真似ですか？」

其処にいるのは、蓮美の高校の先輩だった柏木 圭一だった。

確か、柏木先輩は高校卒業後にフランスの大学へ留学するとか聞いていたけど、何で？ここは、イギリスでしょ？

頭が相当混乱している蓮美は、昔陸上部で長距離ランナーとして活躍していた。だが、お互い顔は見た事がない筈だ。何しろ、蓮美が入学して来る数週間前に圭一は、高校を卒業していたからだ。だが、蓮美が中学の時に陸上をやっていた事もあって、蓮美は中学の陸上では、全国記録を持っている。そのせいもあってか、強化練習や強化合宿などの公式練習には、かならず設備が整った高校（後に蓮美が通う事になった）のグラウンドを使わせてもらっていた。

「強化合宿以来だね。どうして君こそ、このイギリスにいるんだい？」

懐かしい先輩に聞かれて、少し蓮美の目が右往左往と泳いでいる。どう答えたら良いのかな…。別に私は悪い事なんかしていないし。それに、妊婦だから！（まだ、蓮美は鷹峰の子を妊娠していると思っっている）そのせいも、頻りにお腹を庇うような仕草を無意識の内にしてしまっている。

あれだけ、鷹峰が抱き締めたり添い寝するだけでは、子供は出来な
いと言っけていても蓮美の思い込みは激しかった。

「え？ えーつとですね…くそ親父の借金を肩代わりしてくれた人に会つと言っつか、親父がその人にも借金をしてしまったと言っつか…」

「そっかい。大変だったね」

良かった〜信じてもらえたみたい…。だって、？は言っていないもん！これだけは胸を張って言えるわ！

「はあく。先輩は？ フランスじゃなかったんですか？」

「いや。イギリスの大学に通っているんだ」

「へー。大学ではどんな事を勉強しているんですか？」

「遺伝子工学だよ。壊しても壊しても、ある化学記号を使った物で作られた薬品を使えば、肉体だろうと、金属だろうと時間はかかるが、元通りに戻るんだよ。そんな研究をしているんだ」

「不死ですか？ 人類の夢ですね。その薬品は出来上がったんですか？」

「いや。困った事に、まだなんだよな…。これが。その化学式が見つからなくてね…。蓮見ちゃん、知らないかい？」

な、何を言っているのこの人は？

どうして、私がそんな事を知らなくちゃいけないの？

一体、私は何を知っていると云うの？

にこやかに微笑む柏木を見ながら、蓮美の頭の中では、警報が鳴り響いていた。

に、逃げなくっちゃ！

どうして、先輩はそんな話をしてくるんだろう？なんで、その化学式の事を私が知っていると知っているのだろう？　蓮美の中に疑問が次々と湧いて出て来た。

それに、私はヘンリーさんのお屋敷に居たのに、何で此処にいるの？　どうやって此処に来たんだろう？

「蓮美ちゃん。僕はね……」

圭一の背中に銃が突き付けられている。蓮美は、咄嗟に立ち上がると部屋を飛び出して広い屋敷の中を逃げ回った。

一体、何？何が起こっているの？！

蓮美には、どうして自分ばかりが厄介な物事に巻き込まれて行くのかが、分からず逃げ惑いながら、此処から脱出する方法を探していた。

非常階段のような階段を目にした蓮美は、すぐに階段を駆け上ると屋上の扉を開けた。

そこから広がる景色を見て、蓮美は驚いた。

「此処は……ビックベン！　どうして、こんな所に……」

(飛べ蓮美！)

確かにそう聞こえた。

蓮美は、テラスのような所から思いっきりジャンプすると、空中に身を投げ出した。

下へと落ちて行くこうとする蓮美を捕獲するかのように、大きな鳥の

影が蓮美を攫う。

慌てて自分を攫った人の顔を見てみると、鷹峰さんだった。

「どうして?」

「どうしてでしょうね?」

「鷹峰さん……」

「私を呼んだのは蓮美様ですよ。呼ばれたのでお救いに来ただけです。旦那様が心配していらっしやいます。早くお屋敷へ戻りましょう」

鷹峰は、ハングラライダーを片手で操りながら、もう一方の腕で蓮實を抱き締めると、大空の彼方へと飛んで行く。

「蓮美様。私の声が聞こえましたか?」

「は、はい」

思わず彼の顔を見ると、紫に輝く瞳を持っている……。

「そ、その瞳……私と同じ……」

「そうですね。ですが、蓮美様の方が色が濃いですよ」

そう言われれば、私も母も同じ様に暗闇の中で紫に輝く瞳を持っている。

どうして、私と母だけなんだろうと思っていただけ……。

この人もなんだ。

じゃあ、私のお腹の中にいるこの子も、同じ様に瞳が紫色に輝くのかしら？

(蓮美は、まだ自分が妊娠していると信じています)

「あ、あの．．．鷹峰さん？降りる時はそつとあまりお腹に衝撃を与えないで下さい．．．。でないと、お腹の子が．．．」

はあくど溜息をついている鷹峰を見た蓮美は、ムツとしながらも「赤ちゃんが．．．」そう言いかけた。

「蓮美様は、そんなに赤ちゃんが欲しいのですか？」

「え？ そんな．．．あ、あの．．．鷹峰さん？」

近くのウィンブルドンの競技場に2人は降り立った。着地の時にハングライダーのバーがお腹に強打した蓮美は、お腹を押さえると痛そうに踞った。

「蓮美様！」

「赤ちゃんが！！」だから、出来てません！！」

競技場に駆けつけた鷹峰の部下達が、ハングライダーを仕舞うと2人を出口まで誘導して行った。

高峰は、踞る蓮美を抱き上げると走って行った。

どうして、鷹峰さんは私のお腹の中に赤ちゃんがないと言い張るんだらう？

何の根拠があつてそんな事をいうのだらう？

蓮美には何も分からなかった。

『蓮美様。何か分からない事がありましたら、何でも私にお聞き下さい。全て教えて差し上げますよ』

以前、鷹峰にそう言われていた事を思い出した蓮美は、走り出す車の中で悶々と考えていた。

「どうしされましたか 蓮美様？」

「．．．．．えて．．．．．」

ハンドルを握っている鷹峰さんが蓮美を凝視している。

「蓮美様。今何とおっしゃいましたか？」

「鷹峰さん．．．．．教えて下さい。どうやって子供が出来るんですか？」

「．．．．．実践が宜しいですか？それとも口答でお答えした方がよろしいですか？」

「じ、実践って抱き締めるだけなのに、まだ色々やるんですか？」

鷹峰は、車を自分の屋敷の敷地に止めると、助手席のドアを開け、蓮美を抱き抱えた。

「蓮美様。もし、これで本当に子供が出来たら、必ず責任は取りますから。ご安心下さい」

「責任つて、私．．．死ぬんですか?!」

蓮美のムードもへつたくれもない言葉に、ガクツと肩を落としながらも鷹峰は、屋敷の中へと入って行った。

「良いですか、蓮美様。自分の身体が感じる様に声を出してみてくださいよ」

「熱い!」

「．．．．．では、暖房を切りましょう。まず、初めは口ですよ」

そう言うと、鷹峰は蓮美の小さな顔を両手で挟むと彼女の小さな唇を啄む様に重ねた。

「どつですか?」

「くすぐつたいです」

「そうですね、ならこれではどつでしょう」

鷹峰は、貪る様に蓮美の唇を重ねると、唇をこじ開け舌をねじ込ん

だ。

初めての経験に、頭がクラクラして来た蓮美は、鷹峰に寄っかかる。

「どうですか？」

「き、気持ち良いのか悪いのか分からないけど、お腹の中心がモワッ熱くなる・・・これって悪阻ですか？」

蓮美の言葉にクスツと笑うと鷹峰は、彼女の首筋に唇を這わせた。

「ん・・・んあ・・・」

「そうですよ。声を出して下さっても構いません。あなたの思うままに感じるままを私に見せて下さい」

「え・・・ああん」

耳朵を軽く噛まれ、息を吹きかけられた蓮美は、「ひゃん」と小さく声を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9451w/>

金か愛か人生か

2011年12月23日04時50分発行